

目次

はじめに	4
この答申の要点	5
図表一覧	13
第1章. 公民館活動と利用者交流の場の基本理念	15
1.1 公民館活動の基本理念	17
1.1.1 公民館設置の背景	17
1.1.2 公民館活動の柱	18
1.1.3 公民館の新たな役割	19
1.2 利用者交流の場の基本理念	20
1.2.1 利用者交流の場の意義、必要性	20
1.2.2 利用者交流の目的 —利用者との交流から広く市民の交流へ—	21
第2章 利用者交流の場の現状と課題	23
2.1 福生市公民館のこれまでの成果	25
2.1.1 主催講座の成果	25
2.1.2 サークル活動の成果	26
2.1.3 まつりの成果	27
2.1.4 利用者連絡会・交流会、研修会の成果	28
2.1.5 公民館のつどいの成果	29
2.2 3館の利用者交流の場の現状と課題	30
2.2.1 主催講座の現状と課題	30
2.2.2 サークル活動の現状と課題	32
2.2.3 まつりの現状と課題	34
2.2.4 利用者連絡会・交流会、研修会の現状と課題	35
2.2.5 公民館のつどいの現状と課題	36
第3章. 他地域に見るヒント	39
3.1 市民の対話の広場としての可能性(東京都小金井市)	41
3.2 市民の学びから市民活動へ(東京都板橋区)	43
3.3 公民館でESD(岡山県岡山市)	44
3.4 なかまちテラスLINKSと企画実行委員会(東京都小平市)	46
第4章. 7つの提言—福生型ESDの実現に向けて—	47
4.1 事業をおもしろく!	49
4.2 若者を巻き込もう!	52
4.3 職員にさらに考えてほしいこと!	54
4.4 講座参加者とサークル参加者のバランスを!	55
4.5 館間交流の仕掛けを!	57
4.6 リーダーを育てよう!	59
4.7 活性化への指標(評価の仕組み)を持とう!	60
資料集一覧	61
執筆者一覧	77
諮問 福教公発第183号	79
諮問検討会 開催記録一覧	80

福生市公民館運営審議会
平成28年度答申

「公民館における
利用者交流の場のあり方について」

平成28年10月19日

はじめに

福生市公民館3館は（本館 昭和52年、松林分館 昭和54年、白梅分館 昭和55年）設立後今日に至るまで、市民の学習権の保障と活動の支援、そして文化活動の拠点の一つとしてさまざまな事業を行ってきました。

特に、人々が集い・学び・交流する生涯学習・社会教育の中核的な拠点として、活力と潤いのある地域社会の実現に大きく貢献してきました。

しかしながら、今日の少子・高齢化、情報技術の高度化、ライフスタイルや価値観の多様化、社会の変化に伴って、公民館に求められる役割も変化してきています。その中において、福生市公民館は、常に困難な状況の時にも職員が市民とともに力を合わせて、その使命を果たしてきました。

同時に、公運審は公民館長からその時々にご相談を受け、答申を行って公民館活動の発展に寄与してきました。直近では、

- ・「NPO（特定非営利活動）法人への対処について」（平成12年2月10日答申）
- ・「公民館の管理運営について」（平成17年11月3日答申）
- ・「福生市公民館の将来像について」（平成20年3月29日答申）
- ・「公民館の情報提供の在り方について」（平成24年11月21日答申）

があげられます。

今回、公民館長より受けた諮問、「公民館における利用者交流の場のあり方について」は、福生市公民館が抱える大きな課題解決に直結するものと受け止め、以下の項目を重点として、限られた時間の中で精力的に検討を重ねてきました。

- ① つどい、利用者連絡会・交流会、講座、まつり等の歴史・実態
- ② 第56回関東甲信越静公民館研究大会（平成27年度）の内容「ESDの視点」
- ③ 特徴的な区市の取り組み

戦後70年を経て、今日、公民館は大きな岐路に立たされています。公民館が将来にわたって持続的に発展していくために、昨年度の関東甲信越静公民館研究大会で大きく取り上げられたESD（Education for Sustainable Development＝持続可能な開発のための教育・持続可能な社会づくり 以下ESD）の考え方も視野に入れながら提言をまとめました。

委員一同、この提言が、今後の福生市公民館の発展に寄与できることを願い、答申といたします。

福生市公民館運営審議会
委員長 小野寺 高次

公民館における利用者交流の場のあり方について

この答申の要点

第1章 公民館活動と利用者交流の場の基本理念

1.1 公民館活動の基本理念

公民館は、戦後間もない1946年に日本で創設されて以来、一貫して日本における生涯学習・社会教育の中核機関としての役割を担ってきました。超高齢化社会・人口減少社会の中で、地域が将来にわたって持続的に発展していくためには地域の住民たちが日々、楽しく学びあい、体を動かし、自然や環境とも調和しながら次世代である子どもたちを育てていく、そういう豊かな暮らしを一人でも多くの人が実現していかなければなりません。公民館はそうした子育てや暮らしを豊かに発展させるための学習を実現するための場であり、地域の大切な財産です。公民館を活かすか活かさないかによって「地域の未来が決まる」という過言ではありません。

公民館活動には講座とサークル活動という柱があり、その二つは“車の両輪”といえます。そしてこの二つの柱を支える車（公民館活動）に乗る、利用者交流の場というもう一つの柱があります。

こうした公民館活動を通して、今日まで、福生市民は身近な問題から大きな社会問題まで、その時々の課題を把握し、その解決のために多くの活動を行ってきました。今日、地球環境に人間が及ぼしている影響を考えると、他人事としてはなく、一人の人間として、自分の問題として捉えていくことが求められています。価値観・生活態度を変えなければいけないところまできています。できるところから取り組んでいこう、これがESDの概念であろうと考えられます。公民館が今までに果たしてきた役割、実績を顧みるとき、今までの課題に加えて、こうした新たな課題に柔軟に対応できるのはやはり公民館であると考えられます。

1.2 利用者交流の場の基本理念

公民館活動の大きな柱は公民館が主催する講座とサークル活動です。さらに第3の柱ともいべき、つどい、利用者連絡会・交流会、研修会、まつり等があります。利用者交流の場とは、公民館を利用するすべての者が交流する場と捉え、講座、サークル、つどい、利用者連絡会・交流会、研修会、まつり等を含みます。

公民館は、公民館主催の講座に参加した者が、その出会いや学びをきっかけとして、サークル活動へ発展させる手助けや、同じ志を持つ仲間との活動の場として機能してきました。そして、同じ公民館、また市内の3館（本館、松林分館、白梅分館 以下3館）の公民館を利用する者同士の利用者交流の場として、各館の利用者連絡会・交流会、公民館のつどい、研修会が実施されてきました。

利用者交流には、「講座参加者の交流」、「サークル参加者の交流」、「市民の居場所づくり」、「外国人との交流」などがあり、「交流の場」は、公民館活動の集大成と位置付けることができます。

公民館は、文部次官通牒や「公民館の建設（寺中作雄著）」で明らかにされている設置目的と機能と役割で、住民同士が「出合いの場」「学び合いの場」「連帯する場」として、地域づくりの主体を形成する拠点とされており、住民の学びあいの場として利用者交流の場を保证することの意義は、法的にも明確です。

第2章 利用者交流の場の成果と今後の課題

2.1 福生市公民館のこれまでの成果

福生市公民館の現行の事業のなかには、主催講座をはじめ市民との関わりを強く持つしかも成果をあげているものが多く見られます。いずれも社会的意味合いを加味したものとなっており、地域交流、情報発信、世代対応、市民協働などの局面で一定の取り組みがなされている様子がうかがえます。さらに新規講座の開拓などでESDの発想にスタンスを転換し地域課題の解決型事業に発展させていく方向を目指すのが良いと考えます。

福生市公民館が開設されてから約40年の歩みの中で、様々なサークルが生まれ、活動が続ける中で市民の教養と文化水準の向上と、活動を通じた交流の促進に寄与してきました。その活動内容は、学習を目的としたサークルから文化活動サークルまで、多種多様なサークルが存在し、市民の関心が高まっています。

公民館は学びの場であると同時に、それを実現する活動として特色ある「公民館まつり」が展開されています。3館総じていえることは、これらの「公民館まつり」では、こつこつと日々行われている文化的な営み、それを利用者が担って地域に広げていく活動がなされています。企画手段としての実行委員会が多大な努力をしています。

福生市公民館の3館各館で開催されている利用者連絡会・交流会は各サークルの代表を中心としたメンバーで構成されており、ルール(規約やきまり)づくりのほか、3館合同で開催される「公民館のつどい」への企画提案の場にもなってきました。この場を通してサークル間の意見交換、新企画の発掘、役員改選によるリーダー発掘が行われてきました。

利用者研修会は、各館がそれぞれ年1回開催しています。各館ではその時々に関心に応じて独自にテーマ設定、講師の選定がなされており、関連な意見交換がなされています。

ことです。そしてつどいの場面では課題や意見がたくさん出てくること自体はとも良いことですが、せつかく出てきたにもかかわらずこれらを活かす行動に繋がっていません。その場限りにならないで棚卸（優先順、軽重判断など）をする別の機会（場）が必要です。公民館に携わる職員、利用者の両方に意識転換とそれを行動に移すエネルギー、受け止める仕掛けが求められています。

第3章 他地域に見るヒント

平成26年4月、小金井市に誕生した地域センター「貫井北センター」は、公民館と図書館を併設した複合施設であり、市民の集いの場、世代を超えた市民の対話の可能性を提供する地域センターとして、図書館とのコラボレーション、市民団体との緊密な活動企画、学校（小・中・高）とのコラボレーションの模索といった点が参考になります。

東京都板橋区は、昭和57年の国際障害者年をきっかけに、「板橋区ともに生きる福祉連絡会（板福連）」が結成され、グループホームの運営など福祉教育を推進しながら、板橋にボランティア活動を根付かせていきました。平成18年からは、国連が示した「持続可能な開発のための教育の10年（DESD）」を「持続可能な未来のための学びの10年」と読み替え、これまで実践してきた「ともに生きる」、「ともに学ぶ」を発展させ、地域に生活する人々の尊厳のある生き方を支援するまちづくり、「ともに創る」を目指しています。福生市公民館のヒントとして役に立つと思われることとしては、ボランティア学習事業の考え方、社会教育職員の働き、行政と市民との協働、被災地支援です。

岡山県岡山市は、中学校区にほぼ1つの公民館があり、地域に密着した、地域課題を解決することをテーマにESDを推進しています。福生市公民館がヒントとして役立つと思われることは、ESDの考え方と実践の先駆者であること、社会教育の拠点としての公民館という考え方、地域課題の解決への取り組みです。

東京都小平市では、仲町公民館の建て替えによって誕生した「なかまちテラス」が、従来の公民館と図書館機能を越えて、地域の学びとつながりづくりの拠点となることで、なかまちテラスを核とした地域協働の場「なかまちテラスLiNKs」が設立・運営されています。また、公民館の目標について、「学習活動を通じて、相互信頼の高い地域社会の形成に貢献する」に加え、「さらに利用者数を増やしていき、公民館を市民と行政の協働の拠点として位置づけていく」を明確にし、具体的な協働として、公民館事業企画委員会と同企画実行委員会が提案されました。福生市公民館がヒントとして役に立つと思われることは、図書館と公

公民館のつどいは、昭和57年第1回をかわきりに毎年行われており、平成27年で34回を数えています。毎年4月から実行委員会を持ち、公民館3館合同で協力し合い当年度のテーマや狙い・進め方を念入りに討議し企画しています。最近実行委員会など利用者の集まりでは「継続は力なり」が合言葉になっています。この状況も公民館として誇れる一面といえます。

2.2 3館の利用者交流の場の現状と課題

主催講座の年間計画は公民館長が年度初めに提示する「福生市公民館 運営方針」に基づいて策定され、各年度の講座のテーマは継続、新規が混在しながら実施されてきました。主催講座では、各講座の社会的意味合いを福生独自の分類で整理してきましたが、講座の名称と照らしてみるとこの分類が現況に即したものでどうか再度検討が必要です。また組織としての方針がどの課題と関連するのかわかりづらい面があります。今後、講座の狙いや内容がはつきりしていることがより大切であること、さらに参加人数を増やす工夫を重ねることに留意する必要もあります。さらにESDなど、今後は福生ならではの社会的課題をいま一度整理分析した上で、福生の地域課題に着目した課題、重要度の高い課題から優先して展開してゆくという今までの戦略性をより高めていくことが求められています。

サークルの今後の課題として、サークル数を維持し増やすために主催講座・教室等の終了後、積極的にサークル化するなどの対策をとることや、登録制度のあり方、公民館とサークルの関係、サークルの義務と役割を見直すこと、利用サークルに公民館の役割や利用者交流会に対する理解と意識改革を行うことが必要です。サークル員の高齢化等から会議や研修会、イベント等への参加の在り方を見直すとともに、積極的な参加を促すためモチベーションを高めることも必要です。

まつりの課題として、それを支える所属サークル員の高齢化、固定化がありまます。若い人や地域の方々の意見を広く取り込むことができればより公民館の活動の意味合いが増し、地域に根ざした運営に繋がります。

利用者連絡会、交流会では、出席者が常連化傾向にあり、会議への参加や積極性に乏しい場合があります。次期リーダーの育成が課題です。

利用者研修会は、各館独自のテーマで毎年1回開催されていますが、内容の魅力化への工夫が一層必要です。

公民館のつどいは、毎年実行委員会を5～6回開き当年のテーマや実施内容が決まっていますが、実行委員会の問題はいつも集まる顔ぶれはほぼ同じである

民館の有機的運用、公民館事業企画実行委員会の存在、地域協働の場の運営です。

第4章 7つの提言—福生型ESDの実現に向けて—

これまで述べてきたことを踏まえ、公民館における利用者交流の場のあり方について以下の7点を提言いたします。

1. 事業をおもしろく！

利用者に“おもしろさ”をより感じていただける事業のためには、事業をおもしろくするための提案(表10)をひとつずつ前に進めることです。その進め方(手法)として“おもしろさ追求”に向けて公民館職員の年間の組織目標、それに基づく個人別の業務目標を設定し、業務を展開することで新しい交流の場のあり方を拓き、さらに公民館職員のみならず公民館利用者(サークル構成員、講座参加者)、地域住民などで表10の「実現手段(一例)」欄を深掘りすることを提言いたします。

2. 若者を巻き込もう！

現代の若者が直面していると思われる課題は、雇用問題と居場所をなくしている若者が少なくないという現実です。そこでまず、居場所のない若者、障がい者、高齢者そして外国人が、気軽に足を運べるような空間(「市民カフェ」)の企画を提案いたします。次に公民館活動を市民全体の活動に広げるために、20代、30代の若者のみならず、子供達にも公民館活動に参加する機会をつくることを提案いたします。さらに若者の関心を呼ぶサークル活動、講座等を展開することにより、若者が公民館活動に目を向けてくれるような活動を提言いたします。

3. 職員にさらに考えて欲しいこと！

職員にさらに考えて欲しいこととして「多様化に対応できる活動を」、「他部署との情報交換」、「会議の生産性を意識」、「街の中に飛び込め」の4点に今よりまして取り組むことを提言いたします。

4. 講座参加者とサークル参加者のバランスを！

講座とサークル活動を公民館の柱とすれば、利用者連絡会・交流会、つどい、研修会は公民館の礎石といえます。現状は利用者連絡会・交流会、つどい、研修会はサークル活動との結びつきはかなり強いが、講座との関係はこれに比べ希薄であります。今後は「福生型ESDの実現」に向けて、利用者連絡会・交流会、つどい、研修会をさらに活発・充実させるために講座との関わり・結びつきを強化し、またサークルによる講座支援も一層すすめることを提言いたします。

5. 館間交流の仕掛けを！

現状を打破し、各館に新たな風や考え方を吹き込むことによって、各館、各サークルのマンネリからの脱却と活性化、そして知識(学び)の更なる向上が期待

図表一覧

表番号	表名称	記載章項
表1	講座等事業の成果	2.1.1
表2	利用者連絡会・交流会の活動内容と成果	2.1.4
表3	各館のテーマと成果（3年間）	2.1.4
表4	公民館のつどい 過去4回の成果・総括	2.1.5
表5	平成27年度 講座の傾向（回数と参加人数）	2.2.1
表6	利用者連絡会・交流会の現状と課題	2.2.4
表7	研修会の現状と課題	2.2.4
表8	公民館のつどい歴代テーマ一覧	2.2.5
表9	公民館活動の課題	2.2.5
表10	事業をおもしろくするための提案	4.1
表11	館間交流の現状と可能性及び仕掛けについて	4.5
表12	活性化への指標	4.7

図番号	図名称	記載章項
図1	講座件数の課題別傾向	2.2.1
図2	講座回数と参加人数	2.2.1
図3	サークル活動や講座と交流の場との関わりの形態	4.4
図4	公民館3館の利用者数の推移【平成22年～26年】	4.4

でき、元気な公民館を具現化します。その方法として、複数館による共通分野での発表会や交流の場の企画検討会（利用者連絡会・交流会、職員、公運審等）を企画推進、「増やそう、壁のない公民館、総合力で推進」をキーワードに持続可能な企画検討を実施していくことを提言いたします。

6. リーダーを育てよう！

豊富な地域の人材を活用するため、リーダー人材ネットワークとして、「地域リーダーバンク」を公民館が構築し機能させること、また、3館共通の「地域リーダー養成講座」を並行して設置すること、経験を積んだ「エキスパート職員」として公民館活動を熟知する専門職員（社会教育主事）を公民館に配置し、地域とのつながりを強めていくことを提言いたします。

7. 活性化への指標（評価の仕組み）を持とう！

公民館における様々な事業・取り組みが活性化しているかどうか判断する指標（規準・基準）をはっきりさせ、それに基づいて評価し、次に繋げていくPDCAサイクルを実現すること、さらに評価結果は福生市広報、公民館日より、各館により等で、定期的又は随時に公表することを提言いたします。

1.1 公民館活動の基本理念

1.1.1 公民館設置の背景

—なぜ今、公民館が必要なのでしょう？—

公民館は、戦後間もない1946年に日本で創設されて以来、一貫して日本における生涯学習・社会教育の中核機関としての役割を担ってきました。今日では「公民館」と名のつかない施設も増えていますが、地域のあらゆる人々の総合的な学習を支えるセンターとしての公民館は、「すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する」という憲法26条の理念を、主権者である私たち一人ひとりの主体的な参加により、より一層確かなものとして実現・発展させていくための拠点といえます。

公民館は類似施設を含めると全国におよそ16,000館がありますが、その中には、主催事業の縮小・消滅や専門職員の削減、専門性を有しない事業者への管理委託などにより、公民館としての本来のあり方をはずれ、単なる場所貸しだけに留まってしまっている地域も見受けられます。こうした地域では、住民同士のつながりが希薄になり、たとえば突然の災害発生時に地域の相互の助け合いが十分に行われなかった問題が起きます。こうした地域では外部からのさまざまなリスクに対する脆弱（ぜいじゃく）性が高くなり、跳（は）ね返す力（レジリエンス）が弱まるため、何らかの災害や事故をきっかけに地域の人口が急速に減少し地域の衰退が起きる傾向も見られます。最近では将来の「消滅」がさややかれている地域すらあります。

こうした地域の「持続不可能性」を防ぐもつとも重要で有効な方策は、住民自らが様々な地域の学習文化活動に積極的に参加し、そしてその運営に主体的にかかわりながら地域の学習・教育を計画的に進めていくことにあります。超高齢化社会・人口減少社会の中で、地域が将来にわたって持続的に発展していくためにはその地域の住民たちが日々、健康で生き生きと充実した暮らしをしていくことが重要です。そのためには仲間とともに楽しく学びあい、体を動かしながら、自然や環境とも調和しながら次世代である子どもたちを育てていく、そういう豊かな暮らしを一人でも多くの人が実現していける地域にしていきたいものです。公民館はそうした子育てや暮らしを豊かに発展させるための学習を支援する場であり、地域の大切な財産なのです。この財産である公民館を生かすか生かさないかによって「地域の未来が決まる」といっても過言ではないでしょう。

第1章

公民館活動と利用者交流の場の基本理念

1.1.1.2 公民館活動の柱

公民館活動には講座とサークル活動という柱があり、その二つは“車の両輪”といえます。そしてこの二つの柱を支える車（公民館活動）に乗る、利用者交流の場というもう一つの柱があります。ここでは車の両輪たる二つの柱について述べます。

(1) 主催事業としての講座

講座は、地域住民として生活していく中で市民が今現在学びたいこと、今後どのようなことを学ばなければならないかを公民館が設定した学習の場です。教育機関としての公民館は、市民の学びを専門的に援助するための職員が配置され、市民が学習する場を提供しています。

公民館は社会教育を行う場としての観点から、教育的、長期的展望を持ち、一定の社会的評価が得られる内容の講座を企画します。講座によって、通年または複数年にわたって継続されるものもあります。

公民館の講座は住民主体の事業として、単に住民の知的好奇心を満たすだけではなく、住民を取り巻く地域の課題や問題解決の糸口となり得るもの、得られた知識や技術を生活向上のために活かすことができ、豊かで充実した人生を送るための糧となる内容であることが求められます。講座を通じて住民自らが地域、生活に対する問題意識を持つことや、地域活動参加意欲を促すことができるのです。

また、大勢の人が講座を受講することにより、地域の活性化やネットワーク形成の一端を担うことができます。

(2) サークル活動

サークル活動は、公民館で得た知識や技術を共に教え、学びあう自主的な学習活動の場です。サークル活動を通じて社会性・民主性・協調性・自主性などを培うことができます。また個々のサークルが連携することによって、地域やまちを変えていく原動力に結びつくことを意識した活動となっています。

学びあう場としてだけではなく、仲間と共に過ごすことにより今よりもっと上達したい、自分の持っている知識や技術をほかの人に教えたいといった向上心が芽生え、生活に生きがいを得ることに繋がります。

学習を通して地域の問題解決や地域文化を創造するまちづくり活動を行い、互いに協力することで生活を豊かにする仲間作りをすることがサークル活動です。公民館で培った地域・生活に対する問題意識や参加意欲を大切に、学んだ成果を適切に反映できるよう、社会教育の公共性や役割を意識し活動に取り組むことを目指していくことがサークル活動の目標の一つです。

1.1.1.3 公民館の新たな役割

今日まで、福生市民は身近な問題から大きな社会問題まで、その時々課題を把握し、その解決のために多くの活動を行ってきました。特に公民館はその先頭に立ち、大きな貢献をしてきました。社会教育の重要性に鑑み、今後とも公民館の果たすべき役割は大きくその存在意義は変わらなないと考えます。

地球環境・自然環境の異変と人間との接点を取りざたされて久しいですが、地球環境に人間が及ぼしている影響を考えると、他人事としてではなく一人の人間として、自分の問題として捉えていくことが求められています。このままではいけない、正に価値観・生活態度を変えなければいけないところまできています。「できるところから取り組んでいこう」、これがESDの基本的理念です。公民館がこれまで果たしてきた役割、実績を顧みると、今までの課題に加えて、新たな課題に柔軟に対応できるのはやはり公民館であると考えます。

これからの公民館は、今まで以上に他の領域と協働しながら活動していくことが重要になってくると考えます。地域の暮らしの中で起きている大小様々なことに焦点を当てて、それを地域課題だと認識していくことが大切になります。そういう意味で、たくさんのアンテナが必要になります。特に、地域の課題だと位置づける職員の目、共感する力が必要になってきます。

第56回関東甲信越静公民館研究大会において、「公民館が社会と繋がろうとしない限り未来は開けない。繋がるきっかけまたは手段としてESDは最高と考える。公民館の事業をESDの視点で捉え直し、幅広い関係者と積極的に連携協力していく必要がある。」と話された言葉が思い出されます。

さらに、公民館の職員像として、「ばんそう（伴奏、伴奏）者が必要です。それは、多様性を前提にした集団に関わっていく能力がある人、多様性を受け入れながら、集団として全体が向かおうとする方向性を見失わない人です。」とも話されました。

現在、福生市では、公民館活動以外にもボランティア活動、町内会、老人会など、様々な市民活動の範囲が広がっています。多くの団体との協働を模索しながら、公民館としての活動を見直していく必要があります。そのうえで、「利用者とは、全市民である。」との認識に立って、各種の講座開設、講演会の実施、サークル活動への働きかけ、利用者連絡会・交流会、つどい等をリードしていくことが求められています。

1.2 利用者交流の場の基本理念

1.2.1 利用者交流の場の意義、必要性

公民館活動の大きな柱は公民館が主催する講座とサークル活動です。更に第3の柱ともいえるべき、つどい、利用者連絡会・交流会、研修会、まつり等があります。利用者交流の場とは、公民館を利用するすべての者が交流する場と捉え、講座、サークル、つどい、利用者連絡会・交流会、研修会、まつり等を含みます。

公民館は、公民館主催の講座に参加した者が、その出会いや学びをきっかけとして、サークル活動へ発展させる手助けや、同じ志を持つ仲間との活動の場として機能してきました。そして、同じ公民館、また市内の3館の公民館を利用する者同士の利用者交流の場として、各館の利用者連絡会・交流会、公民館のつどい、研修会が実施されてきました。

この利用者交流の場は、

- ① 各々のサークルの内容の把握や情報交換
- ② 公民館職員からの情報提供を基にした行政の状況の把握
- ③ 公民館（学区）を中心とした地域の状況や課題の把握
- ④ 同じ公民館に共通するハード面・ソフト面についての課題の確認
- ⑤ 地域や市内における人材ネットワークの拡充
- ⑥ 研修を通じた住民意識のスキルアップ
- ⑦ 公民館職員との交流を通して行政担当や組織を知るきっかけ

など利用者にとつて意義あることが認められます。

各サークルにおいて、共通の悩みでもある人材の確保のきっかけとなることも期待できます。

利用者交流の場は、単体のサークル活動のみに留まらず、人と人との横のつながりを広め、世代を超えた縦のつながりにも連なり、ひいては、地域の絆を強めることとなります。

利用者交流の場は、新たな学びの場、知り合う場として、住民としてのスキルアップにもなり、公民館の目的と理念の究極のねらいである「住民自治能力の向上」になるのです。

持続可能な地域づくりには、予測可能な地球規模の自然災害や環境問題に對抗できる「人の力（自治能力を結集すること）」が不可欠です。

その一歩は、利用者交流の場を通じ、「人を知り、人の輪を広げる」ことが肝要と考えます。

1.2.2 利用者交流の目的

―利用者からの交流から広く市民の交流へ―

福生市公民館運営審議会発刊の「公民館運営審議会ハンドブック」（以下「ハンドブック」）によれば、公民館は「地域づくりの拠点」です。また交流会の目的は、「公民館を活動の場として利用するサークルが、自主的に相互連絡の場や情報交換を通して、私たちの公民館活動をよりスムーズにするとともに公民館をより良い活動の場に育てること」です。公民館が、地域社会の抱えている諸問題を把握し、積極的に問題の解決に取り組むことが肝要といえます。公民館がさらに骨太な社会教育の拠点を指すためには、公民館が単独で社会教育を担うのではなく、地域の町内会、社会福祉協議会、NP0 等との連携を視野に入れることも不可欠です。これらの点を踏まえながら、福生市における公民館の交流の場の広がりの可能性を考えます。

(1) 講座参加者の交流

公民館活動の重要な事業として、各種講座があります。社会教育法第20条によれば、公民館の講座は、住民の教養の向上、生活文化の振興、社会福祉の増進等を目的としたものです。従来、「交流会に参加する市民は、概ねサークル活動のメンバーが多数を占めています。したがって、講座を受講している市民にも交流会への参加を呼び掛ければ、サークルと講座という垣根を越えた公民館活動、交流会の新たな展開を創造することが期待できます。また、サークル活動の方々と講座受講者が交流することで、講座のサークル化への新たな可能性を見出すこともできます。

(2) サークル参加者の交流

「ハンドブック」にある通り、交流会は、サークル活動を行っている市民の交流の場です。日頃各サークルで各々独自にサークル活動を行っている方々が、自らの活動を披露し、他のサークルの方々及び市民に自らの活動内容を紹介し、また他のサークル活動の方々と交流することで、他のサークルの活動の内容を理解することができ、またサークル活動全般に共通する問題点、悩み等を相互に話し合い、その処方箋を考える場とすることもできます。

(3) 市民の居場所づくり

核家族、高齢社会、グローバル社会に象徴される急激な社会の変化に対応可能な公民館活動が求められています。地域社会の多様化は、徐々に地域住民の中に孤立を生み出しています。孤立した地域住民は、公民館活動等地域社会の行事等に参加するチャネルを閉ざされ、居場所を失っています。特別な趣味や

目的をもたなくとも自由に集まって話すことのできる「広場」があれば、「居場所」を見出すことが困難な市民のオアシスになるだろうと思います。このような「広場」は、公民館における交流会を従来のようなサークル活動者、講座受講者に限定したものから、より大きな市民規模の交流の場に転換することを視野に入れます。

(4) 外国人との交流

福生市には、50ヶ国以上の国々の外国人が居住しています。外国人にも住みやすい都市であることは、福生市の誇りの一つといえます。福生市に住んでいる外国人にも、公民館の交流の場に出席いただく機会を設けるべきだと思います。既に実施されている料理教室に加えて、日本語教室等も実現しても良いのではないのでしょうか。日本語教室は、外国人の若者の就労にも繋がるのが期待でき、世代を超えて関心を持っていたけると考えます。

こうして「交流の場」は、公民館活動の集大成と位置付けることができず。

第2章

利用者交流の場の現状と課題

2.1 福生市公民館のこれまでの成果

2.1.1 主催講座の成果

現行の事業の中には、主催講座をはじめ市民との関わりを強く持ち、かつ成果をあげているものが多く見られます。それらを表1に整理しました。いずれの項目も社会的意味合いを加味したものとされており、地域交流、情報発信、世代対応、市民協働などの局面で一定の取り組みがなされている様子がうかがえます。

表1 講座等事業の成果

社会的意味合い	維持し発展させたい良い点 (公民館3館の講座一覧表(平成27年度)からピックアップ整理したもの)	新規・継続 の別	発展の期待
地域との交流	地域住民の参加促進(松林だれでもなんでも展、市民音楽祭)	継続	内容の充実 (新規講座など)
	3館合同の交流の場「公民館のつどい」ここにあり。 しかも利用者を越えて広く一般市民にまで開放している。		
	学童クラブとの協働		
	地域の歴史を取り上げた講座シリーズもの		
	福生の自然(四季)に接する講座		
情報発信の 場の提供	地域の経験者との協働で「食育講座」	継続	内容の充実 (新規講座など)
	地域に根付いたまつり 「本館まつり」「松林だれでもなんでも展」「白梅まつり」		
高齢者対応	学びを発表する場の提供(嬉しさ、楽しみ、やりがい) 〔本館まつり〕〔松林だれでもなんでも展〕〔白梅まつり〕〔文化祭〕	継続	内容の充実 (新規講座など)
	3館それぞれの特徴を生かした個性的な「まつり」各館恒例化		
子育て世代配慮	高齢者への生き甲斐の提供 (「キョウウイック」「キョウヨウ」に寄与)	継続	内容の充実 (新規講座など)
	保育室併設講座、託児保育付講座		
市民協働	行政と市民との協働	今後	従来慣習から ESD的77ローチへ
上記以外	(未着手分野の開拓の検討・実施に期待)	今後	地域課題に着目

上記表1のような成果が見られますが、さらに公民館の近代化のためには次のことがいえます。

継続扱いで実行している項目については今後も継続していきと思われませんが、その場合さらに新規講座の開拓などで内容の幅を広げていきたいものです。市民協働の面では従来慣習も大事ではありますが、ESD的発想にスタンスを転換し地域課題の解決型事業に発展させていく方向を目指すのが良いと考えます。現行においてとてもいい慣習を持って成果を挙げていますので、この勢いで今後は現在持っている知見を大いに活用しながら、地域住民を巻き込みより地域の実態にフォーカスした講座の実施、事業の展開を期待します。

2.1.2 サークル活動の成果

本館、松林分館、白梅分館のサークル活動の成果について述べます。福生市公民館が開設されてから約40年の歩みの中で、様々なサークルが生まれ、活動を続ける中で市民の教養と文化水準の向上と、活動を通じた交流の促進に寄与してきました。その活動内容は、学習を目的としたサークルから文化活動サークルまで、実に多種多様なサークルが存在し、市民の関心が高まっています。

サークル活動は、公民館のまつりへの寄与に著しいものがあります。本館まつり、松林分館のだれでもなんでも展、白梅まつりでは各々の館で活動するほとんどのサークルが参加し、展示、演示、模範店などまつりの運営に携わり、サークルの総合力を発揮してまつりを盛り上げています。

本館の34回の歴史を誇る福生市民音楽祭は、市民音楽講座の発表などを核に多数のサークルが支え、一般市民も参加するという事業に育ってきています。

松林分館では、開設当初から途切れることなく30数年活動を続けているコーラス虹など、サークルが困難を克服し活力を育んできたといえます。

白梅分館では、代表的なサークル熟年ひろば(開設35年)がタイムリーな時事問題から行政の課題など、奥の深い幅広い学びと活動で成果を残しています。

3館とも、上記以外にも多くのサークルが活発な活動で成果を挙げています。

2.1.3 まつりの成果

公民館は学びの場であると同時に、それを実現する活動として特色ある公民館まつりが展開されています。

毎年行われる本館まつりは多岐にわたるサークルに支えられ、参加者は3千人を超える賑わいです。とりわけサークル参加者の協力が大きく、模擬店、演示、展示、子ども遊びなど各部門を盛り上げています。

松林分館は自由闊達な風土の象徴としてただでなく展という慣習が生まれました。手づくり、下駄履きでサークルだけでなく個人も参加でき多彩なまつりを構成しています。

白梅分館は熊川地域の長い歴史に根づいた特徴ある文化と、結束のある地域性に支えられています。演示部門のくまこ雛子連などがその代表的なものです。白梅まつりは展示、演示、模擬店などはサークルの全員参加をモットーで運営されています。おばあちゃんや孫の手を携えて来場する光景はほほえましく、公民館活動の原点ともいえます。

3館総じていえることは、こつこつと日々行われている文化的な営み、それを利用者と地域の人々が担って地域に広げていく活動がなされていることです。企画手段として実行委員会が多大な努力をしています。

2.1.4 利用者連絡会・交流会、研修会の成果

(1) 利用者連絡会・交流会の活動内容と成果

各館の雰囲気、会議方式、内容の薄い厚い、深い浅い等の違いはありますが、総じて次の表2に示すような成果が認められます。

表2 利用者連絡会・交流会の活動内容と成果

	本館 (サークル数:109)	松林分館 (サークル数43)	白梅分館 (サークル数:40)
活動内容 (本館は利用者連絡会 松林分館、白梅分館は 交流会)	各サークルからの代表者を中心としたメンバーで構成されており、関連な意見交換がなされています。 ・斬新なアイデアも提案されている。 ・利通、交流会のルール(規約やきまり)づくりや安定な状況に応じ行っています。 ・3館合同で開催される「公民館のついで」への企画提案の場になっています。		
成果 (3館共通)	・サークルからの提起事項による議論と意見の集約があります。 ・サークル間の意見交換による相互啓蒙が認められます。 ・意見交換等の中から新企画の発掘に役立っています。 ・役員改選等によるリーダーの発掘に役立っています。		

(2) 利用者研修会

利用者研修会は、3館統一名称が使われており、各館が独自のテーマで年1回開催しています。過去3年間の各館テーマ、成果を表3に示します。

表3 各館のテーマと成果 (3年間)

本館	テーマ・講師(期要)	参加サークル数(人数)
25年度	わたしの活動再発見～学んで共有してひろげよう～伊東勝一氏(元厚生市公民館長)	28(35)
26年度	「これからのサークル活動～新しいつながりを求めて」荒井文昭氏(首都大学軍学教授)	27(38)
27年度	「市民の身でつくられた公民館～公民館外でできる事あれこれ」・村野加藤氏(元かつら公民館を創る市民の芸事務局長)	23(35)
松林分館25年度	瑞穂の立場から「コミニ回政の変更を考える」・厚生市瑞穂課職員	23(17)
26年度	「公民館ってどういふところ？」 ・伊東勝一氏(元厚生市公民館長)	14(38)
27年度	「マイオバンパー制について」 ・総合窓口課長、企画課課長職員	29(41)
白梅分館25年度	「サークル活動と公民館～交流から自治へ」・野澤久人氏(元厚生市長)	27(42)
26年度	「サークル活動と公民館～交流から楽しむ学んで、つながる、広がる～」 ・伊東勝一氏(元厚生市公民館長)	17(35)
27年度	「白梅の魅力と課題」～白梅に過ぎたものさつあり～ 審判員表者: 森田芳伸(前交流会代表) 助言者: 伊東勝一氏(厚生市公民館長)	27(42)
成果	・参加、行われており、継続性・持続性を保っています。 ・各館のテーマが独自性を持ちタイムリーに盛り上げられています。 ・講師の満足に工夫があり、喜ばれています。 ・数名であるが、個人参加者もいます。(松林分館)	

2.1.5 公民館のつどいの成果

昭和57年第1回をかわきりに毎年行われており、平成27年で34回を数えています。継続してきた関係者の努力が大きいです。

毎年4月から実行委員会を持ち、公民館3館合同で協力し合い、当年度のテーマや狙い・進め方を念入りに討議し企画しています。公民館利用者同士が定めた目標に向かって協力し「交流の場」として継続的に実施していることは福生市公民館の誇りです。さらにこの運営は公民館利用者が主導で、職員は後方支援という形です。公民館利用者はもとより地域住民も参加しています。最近、実行委員会など利用者の集まりでは「継続は力なり」が合言葉になっているようです。この状況も公民館として誇れる一面です。

つどい当日は、出会い知り合い交流するという趣旨から運営側ではさまざまな工夫がなされています。今後も途切れることなくこの交流の場を大切にしていきたいものです。

表4に直近4回分の公民館のつどいの成果をまとめてみました。必ずしもテーマに対する結論に至ってはいませんが、参加者の意識が相当程度高まったことは成果です。

表4 公民館のつどい、過去4回の成果・総括

	テーマ	助言者	参加者	成果・総括 (各回の記録集より類推記述)
第31回 H24/11/25	「楽しく充実したサークル活動を をするには」	松田恵示氏 (東京学芸大学 教授)	85名	①「楽しさ」「エネルギー」この二つが広がって深まる ことでサークルは充実してゆく。 ②公民館講座からサークル立ち上げたい。 その背景として講座の充実(ESD的発想)を持とう。 ③公民館が地球住民に支援すべきことは「情報発信」 「交流の環境づくり」「共有体験の機会提供」である。 ④ESD的発想で興味・関心の持てる講座を企画したい。 ⑤利用者は「前向きな人」これが自分自身を豊かにする ⑥人間関係で重要なこと・定量化ではなく定性化だ。 ⑦定量化では測れない部分「達成感」「評価が嬉しい」「さ らなる意欲」を大切にしたい。 ⑧サークルと公民館の協働が必要だろう。 ⑨各館の特性をアピール(発表)し相互共有した。 ⑩利用者たちの自覚が基本であること、サークル活動の 情報発信に工夫が必要なこと等に気づいた。 ⑪ここで得たことを多くの人に話し伝えよう。
第32回 H25/11/23	「公民館再発見」 ～たのしき・まなび・ひろがり～	伊東幹一氏 (東京学芸大学 非常勤講師)	88名	
第33回 H26/11/29	「サークル活動をより楽しむ ための」 ～アンケートから見えること～	伊東幹一氏 (元福生市 公民館長)	88名	
第34回 H27/11/28	「交流」 ～広げていこう地域の輪～	—	88名	

2.2 3館の利用者交流の場の現状と課題

2.2.1 主催講座の現状と課題

主催講座の年間計画は公民館長が年度初めに提示する「福生市公民館 運営方針」に基づいて策定されています。この運営方針には地域に根ざした重要な実施項目が謳われています(平成28年度版)。

各年度の講座のテーマは継続、新規が混在しながら実施されてきました。過去3年間の講座について課題別傾向と講座実施回数および参加者数をそれぞれ図1、図2にグラフ化し、平成27年度の講座の傾向を表5にまとめました。概して熱心な取り組みがうかがえます。

しかしながらここで注目すべき課題が3点あります。

- (1) 課題別項目について
(図1の横軸を参照)。これは講座の社会的意味合いを福生独自の分類で整理したものでここ数年使われてきました。有意義な慣習ですが、講座の名称と照らしてみても必ずしもこの分類が現況に即していないようにも思われます。また組織としての方針がどの課題と関連するののかもわかりづらいことです。
- (2) 回数の多寡より狙い
講座の狙いや内容がはつきりしていることがより大切であること、さらに参加人数を増やす工夫をいかに重ねるかがキートンとなるでしょう。

(図2を参照)

(3) 社会的課題との関連

今や公民館の果たすべき役割の策定にESDの概念を導入する動きが叫ばれています。平成27年度講座の傾向を表5に

整理しました。講座の性格からみてどんな社会的課題に属するかを分類したものです。あくまで講

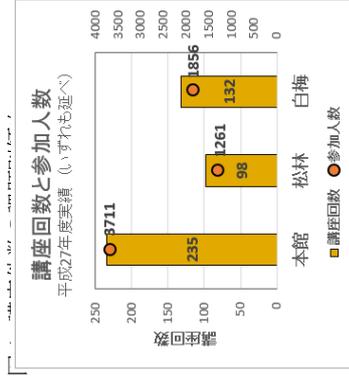
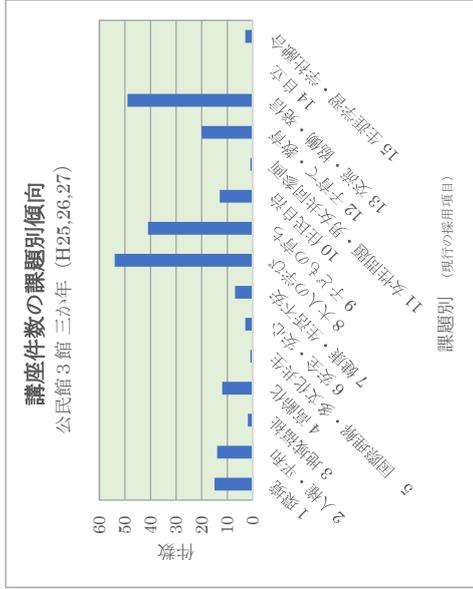


図2 講座回数と参加人数

座の傾向を表現したもので平成27年度に実施された講座名全てをあげているわけではありません。この表で「これからのスタンス」は一例に過ぎませんが、今後は福生ならではの社会的課題をいま一度整理分析した上で、福生の地域課題に着目した課題、重要度の高い課題から優先して展開してゆくと今までの戦略性をより高めていただくことが必要と考えます。

表5 平成27年度 講座の傾向（回数と参加人数）

現行の講座番号	講座名(抜粋)	回数(定べ)	参加人数(定べ)	3種の別(注1)	社会的課題(一欄)(注2)
2	平和講座	8	195	本 松	平和問題
2	白梅平和映画会	1	23	白	
8	市民音楽講座	12	909	本	
15	伝統文化講座	3	34	松	
8	文学講座	12	191	白	文化教養
8	合唱教室	8	218	白	
8	パソコン教室	3	29	白	
9	夏休み教室	32	459	本 松	
13	青年学校にじのはらっぱ	18	286	本	青少年育成
8	ウインターワークショップ	1	15	松	
9	夏休み子ども陶芸教室	5	45	白	
10	フォト講座「福生の魅力再発見」	5	58	本	まちづくり
1	四季歳時記	2	47	白	
8	白梅歴史懇話会	10	329	白	教養・酒養
8	お茶席体験	25	509	本	
12	託児保育付き講座・保育室併設講座	81	775	本 松 白	子育て支援
13	ハッピーセカンドライフセミナー	11	103	本	高齢者問題
3	地域福祉講座	3	46	松	介護福祉
7	健康ハイキング	4	29	松	防犯 防災
10	まちづくり講座	4	62	松	健康問題
2	講演会「裁判員裁判」	1	20	松	都市計画
1	福生の自然を感じる散策 夏 冬	2	28	白	社会的趨勢
1	熊川分水に関する講座	5	56	白	自然環境保全
2	LGBT 講座	6	62	白	性的少数者
13	食育講座	13	145	白	地産地消

(注1) 本：公民館本館、松：松林分館、白：白梅分館
 (注2) 「社会的課題」は一例として項目を記述したもので課題分類はこれにこだわるものではありません。

2.2.2 サークル活動の現状と課題

(1) サークルの現状

- ・登録サークル数は、現状を維持している館(松林分館)と減少傾向にある館(本館、白梅分館)に分かれている。
- ・ライフスタイルや価値観が多様化する中、ボランティア活動をはじめ様々な分野の活動に取り組んでいくサークル員も多い。
- ・公民館活動の中でサークル員の横のつながりを広げていく以上に、様々な分野へ活動の場を広げていく傾向がある。
- ・サークル活動の発表の場であり、地域の交流の場にもなっている「公民館まつり」に照準を合わせ活動内容や目標を立てている。
- ・サークル員の高齢化等による活動の維持困難、子育て世代の減少のほか交流会等の役員を担えず、活動の場を公民館以外の公共施設に変更することが登録団体をやめる理由になっている。
- ・交流会役員のなり手が少ないため、今後の交流会運営を担う人材の育成が進まないことへの危機感を持っている。
- ・サークルの活動日や時間帯、サークル員の高齢化や固定化があり、そのことが若者などの世代を取り込む活動を難しくしている。
- ・サークルによっては新規会員の受入れに消極的であるため、サークル自身が自然消滅に向う例が少なからずある。
- ・公民館を単なる貸館とみなし、活動の場は公民館でなくともよいと考えている利用者が比較的多く存在する。
- ・利用者連絡会への出席率は、20数%から40%であり、特に夜間の出席率が低い。
- ・利用者連絡会に当年度の会代表あるいは役割分担して出席する人は、利用者連絡会の理解と参加意識が低い。

(2) サークルの課題

- サークル数を維持し増やすために次のことがいえます。
 - ・主催講座・教室等の終了後、積極的にサークル化するなどの対策をとる。
 - ・公民館登録制度の在り方、公民館とサークルの関係、サークルの義務と役割を見直す。
 - ・利用サークルに、公民館の役割や利用者交流会に対する理解と意識改革を行う。

2.2.2 サークル活動の現状と課題

(1) サークルの現状

- ・登録サークル数は、現状を維持している館(松林分館)と減少傾向にある館(本館、白梅分館)に分かれている。
- ・ライフスタイルや価値観が多様化する中、ボランティア活動をはじめ様々な分野の活動に取り組んでいるサークルも多い。
- ・公民館活動の中でサークル員の横のつながりを広げていく以上に、様々な分野へ活動の場を広げていく傾向がある。
- ・サークル活動の発表の場であり、地域の交流の場にもなっている「公民館まつり」に照準を合わせ活動内容や目標を立てている。
- ・サークル員の高齢化等による活動の維持困難、子育て世代の減少のほか交流会等の役員を担えず、活動の場を公民館以外の公共施設に変更することが登録団体をやめる理由になっている。
- ・交流会役員のなり手が少ないため、今後の交流会運営を担う人材の育成が進まないことへの危機感を持っている。
- ・サークルの活動日や時間帯、サークル員の高齢化や固定化があり、そのことが若者などの世代を取り込む活動を難しくしている。
- ・サークルによっては新規会員の受入れに消極的であるため、サークル自体が自然消滅に向う例が少なからずある。
- ・公民館を単なる貸館とみなし、活動の場は公民館でなくてもよいと考えている利用者が比較的多く存在する。
- ・利用者連絡会への出席率は、20数%から40%であり、特に夜間の出席率が低い。
- ・利用者連絡会に当年度の会代表あるいは役割分担して出席する人は、利用者連絡会の理解と参加意識が低い。

(2) サークルの課題

- サークル数を維持し増やすために次のことがいえます。
- ・主催講座・教室等の終了後、積極的にサークル化するなどの対策をとる。
 - ・公民館登録制度の在り方、公民館とサークルの関係、サークルの義務と役割を見直す。
 - ・利用サークルに、公民館の役割や利用者交流会に対する理解と意識改革を行う。

- サークル員を取り巻く状況の変化への対応として次のことがいえます。
- ・サークル員の高齢化、活動の多様化と活動範囲の広域化等を考慮する。
 - ・サークル員の高齢化等から会議や研修会、イベント等への参加のあり方を見直すとともに、積極的な参加を促すためモチベーションを高める。

2.2.3 まつりの現状と課題

(1) 各館共通課題

①サークル構成員の高齢化

所属サークル員が高齢化の中、まつり運営にいかにかに若い力を取り込むことが出来るかが今後の課題です。若い方たちが運営するサークルを交流会で支援するものひとつの方法として考えられます。

②実行委員長等役員の選出

各館とも実行委員等役員の選出に悩んでいます。後継者への引き継ぎが出来ないまま、やむなく経験者が継続するという状況が見受けられます。若い方への引き継ぎで新たな思考による運営が必要と考えます。

③地域との協働

固定された顔ぶれで毎年まつりが開催されている現状ですが、広く地域の方々の意見を取り込むことができればより公民館の活動の意味合いが増し、地域に根ざした運営に繋がると考えられます。

(2) 各館の個別課題

① 本館まつり

本館まつりと市民音楽祭の日程が近いため、本館まつりへの企画時間と注力度が希薄になってきている傾向があるのではとの懸念があります。また、会場選定や展示スペースなどの確保に再考が必要かもしれません。参加サークルが減少傾向にありプログラムのコマ数の充足に支障がでていることから、対策を打たないとジリ貧に陥る懸念があります。

② 松林分館「だれでもなんでも展」

「だれでも」の名前の通り武蔵野台のみならず今や福生全域からの参加が得られており、新興地域独特の過去にとらわれない自由闊達な風土で運営を実現しています。しいて課題を挙げるとすると展示スペースの問題があります。施設規模からして難しい課題ですが、年次ごとのやり繰りなど工夫の余地があるかもしれません。

③ 白梅まつり

サークル員の高齢化で会が消滅したり、活動場所を変更するサークルも出てきており白梅まつりを取り巻く環境は厳しい状況にあります。今後、より魅力的な活動を増やしサークルに若年層を勧誘するなど抜本的な工夫が課題です。問題、課題を絶えず真剣に討論する風土は白梅に残っているのでまだまだ可能性があると思います。

2.2.4 利用者連絡会・交流会、研修会の現状と課題

(1) 利用者連絡会・交流会の現状と課題

利用者連絡会・交流会の現状と課題を3館共通事項として表6にまとめました。

表6 利用者連絡会・交流会の現状と課題

現状	課題
<ul style="list-style-type: none"> 登録(サークル・団体)と同時に利連・交流会メンバーとなり、年6回、隔月に実施されます。 出席者は、各サークルの代表者が主体になっています。 参加率(出席サークル/登録サークル数)については各館の差異も認められます。資料5参照。 出席率に関しては、松林分館、白梅分館については、まつりの第1回実行委員会時(交流会と同日開催)に急増する傾向にあります。 出席者は、常連化傾向にあり、新年度代表者が役割としての参加で、一定の割合で存在しています。 会議や行事への関心度や積極性に乏しいことが見受けられます。 	<ul style="list-style-type: none"> 義務的参加者の存在が目立ち、そこから脱却する必要があります。 サークルの年齢構成は、60歳以上が、主体を成し、若返りをはかる必要があります。 サークル相互の交流が希薄で、横への繋がりが少ないです。 公民館に対する理解力が不足しています。 次期リーダーの育成が喫緊の課題となっています。

(2) 研修会の現状と課題

利用者研修会は、各館の内容が異なり、独自のテーマで毎年1回開催されています。過去3年間から見えた現状と課題を表7にまとめました。

表7 研修会の現状と課題

現状	課題
<ul style="list-style-type: none"> 基本的に年間1回の開催となっていますが、松林分館の場合は、年1回ずつの館外研修と座学を実施しています。 サークルとしての過去3年の平均出席率は、本館(30%)、松林分館(55%)、白梅分館(80%)と3館で差異を生じています。資料6参照。 実施にあたっての内容企画は各館ともに利連、交流会主導で、行われています。 出席者の常連化がみられ、関心度や積極性に乏しいように見えます。 テーマは、3館独自の内容で、選定していますが、身近な問題をタイムリーにとりあげているようです。 	<ul style="list-style-type: none"> 現状を動議すると、内容の魅力化への工夫が必要かと思われれます。 示唆に富んだ内容で、サークルへ反映されるような題材テーマが望まれます。 学ぶ意欲を引き起こすことが必要になります。 リーダーの育成と意識改革が必要です。 参加者増加への仕掛けが必要です。

と自体とても良いことなのですが、せっかく出てきてきたにもかかわらず、これらを活かす行動に繋がっていないのが残念です。その場限りにならないで棚卸（優先順、軽重判断など）をする別の機会（場）が必要と言えます。

(3) 派生的な課題

直近4回の公民館のつどいの記録集と本館研修会の記録の中から典型的な事象をピックアップし整理すると、公民館活動の中で何が起きているのかが浮かび上がってきました。表9に現在起きている状況、それがどんな課題として認識できるか、またそれらの解決にはどんな姿勢で臨めばいいかをまとめています。

表9 公民館活動の課題

課題の切り口	過去4年(平成24.25.26.27年)の公民館のつどい記録集より抜粋	解決の糸口
サークルの運営上の悩み(当事者の運営能力)	過去4年(平成24.25.26.27年)の公民館のつどい記録集より抜粋 起きている状況 委員が増えない。減少一方。 実技レベルの差の問題 委員の高齢化 体調不良、家族の介護 高齢者ゆえの自覚、自分本位 コミュニケーションがとれない 委員が働いていて息間の活動ができない 役員のなり手が少ない 利連への理解得られない	サークル当事者が自らの努力で
	サークル仲間やそれを越えての交流(ハイキングなど) 自ら活動を外に発信(難し) 地域と密着した活動 絵手紙、小学生指導、社交ダンス、学童の指導 地域の高齢者の交流 人が集まらない 来ても「いやいや」「仕方なく」が横たわる現実 内容の再考が必要。今は楽しくない 時代に合った新たな「場」が必要かも 抽出課題や議論が集約しない(連続性の要否) 対象者がサークル会員に限定されている 気軽さ・くつろぎ・交流の広がりを持つ場になっていない (交流の場を自由闊達な意見交換の場)	
交流の場の悩み つどい、研修会、利連、交流会	講座終了後の評価の仕方が甘い(第三者判断を加味したい) 地域課題の伝え方がまい(ESD的発想を加味したい) 一例：高齢者対策、女性問題、子どもの貧困、引きこもり、孤独死など 地域貢献が顕在化しない 講座の企画に戦略性がみえない 事業企画に市民協働の機会を サークル活動の現状・・・無意識の「我が勝ち」 他市のいい点を導入しない 公民館事業の見える化(広報、成果) 柔軟な事業企画(特に講座) 社会教育と生涯学習の両方をカバー	「集ければそれでいい」からの脱却を(軸足のシフト) 職員と利用者の協働を深め 仕組みにミス
事業の企画の問題		多岐多岐事業に (取組姿勢の180度転換)
事業運営のひと工夫を		

この表は、当事者が誰なのか(サークル、職員、その両者の別)を示唆しています。このことから今や公民館に携わる職員、利用者の両方に意識転換とそれを行動に移すエネルギー、受け止める仕掛けが求められています。

2.2.5 公民館のつどいの現状と課題
公民館のつどいは平成27年で34回と回を重ねてきました。その間さまざまなテーマで話し合いが持たれてきました。

直近14回の話し合いのテーマは表8のようでした。テーマ名から類推できるように、どれをとっても交流の場をもっと良くしようとの思いが込められたものです。

表8 公民館のつどい歴代テーマ一覧 (第21回～第34回)

第21回	地域こがゆる公民館	第24回	あひともあひとも 公民館のつどいから!
第22回	語り、手紙、あのこと、公民館で	第25回	もしもまた地域が定かたらず?
第23回	見聞とこの世、公民館の手紙から	第26回	楽しく定めたサークル活動をするには
第24回	公民館、手紙、つどい、市民の力	第27回	「公民館は楽しい」 ～あひともあひとも～
第25回	語り、手紙、地域をつくろう、つどいから	第28回	サークル活動をより楽しませるために ～アンケートから見えること～
第26回	あひともあひとも 公民館の手紙から	第29回	交流～つどいでいこう地域の場～
第27回	つどい、つどいの場、届けよう交流の場		
第28回	見聞と、公民館の力!		

(1) 公民館のつどい実行委員会での課題
毎年実行委員会を5～6回開き当年のテーマや実施内容が決まっています。実行委員会の問題はいつも集まる顔ぶれはほぼ同じです。そして運営面では、テーマの字面選定に手間取り内容の吟味まで十分な時間がとれずじまいで時間切れでまとめているという実態があります。マンネリからの脱却が必要です。

(2) 公民館のつどい終了後の課題
公民館のつどいが終了した瞬間はほとんどの参加者が有意義だったと感慨深げに述懐し、話し合いの内容を持ち帰ります。実行委員会は毎回記録集に会の様子を残しているため、助言者からいただいた今後の方向性や、参加者が話し合った内容などがいつでも読み返せる形になっています。

しかし問題がないわけではないわけではありません。公民館のつどいを実施するたびに課題や提案、やってみようとの意見など数多く出てきます。課題や意見が出てくるこ

3.1 市民の対話の広場としての可能性(東京都小金井市)

平成26年4月、小金井市に誕生した地域センター「貫井北センター」(以下センター)は、公民館と図書館を併設した複合施設です。センターに注目した点は、センターが単に複合施設であるということだけではなく、市民の集いの場、世代を超えた市民の対話の可能性を提供する地域センターであると感じたからです。

センターは、NPO法人市民の図書館・公民館こがねい(以下NPOこがねい)によって運営されています。小金井市の公民館は、従来、企画実行委員会制度を導入し、市民、市民団体と行政が協力して運営してきた長年の実績をもっています。小金井市の「第4次小金井市基本構想」の基本理念である「参加と協働」は、小金井市の公民館の歴史を象徴するものと言えます。センターの設立、運営を担った「市民検討委員会」には、学識経験者、町会代表等と並んで、公募市民、公民館運営審議会の代表もメンバーとして参画したとのことです。

「NPO法人市民の図書館・公民館こがねい設立趣旨書(平成25年8月10付)」によれば、従来、行政と市民は、サービスの担い手と受け手という区分によって、公共施設を運用・利用してきたとのこと。しかしながら、市民の生活は多様化し、多岐にわたる市民のニーズにきめ細かく対応するためには、行政と市民が双方向に議論を重ね、同時に行政、市民両者に関係している団体の協働によって行政サービスの向上に対応することが不可欠となると展望しています。そのような観点から、NPO法人運営のセンターが設立されたとのこと。NPOこがねいは、小金井市が事実上立ち上げた法人であり、NPO法人、行政各々の強みを生かし、相互補完の関係で運営されることを狙っています。

センターの2階にある公民館のスペースには、様々な目的で訪れる市民のニーズを満たすコーナーが設けられています。学習室、創作室(絵画、陶芸等)、生活室(保育室、調理室)、演奏対応のスタジオ等々があります。これらのスペースは、単に学びの場というだけではなく、高齢者、若者が同じスペースを共有し、自然に対話できる可能性を提供しています。

次代を担う公民館という観点から、NPO法人が運営する小金井市のセンターの意義を考えます。

第1に、小金井市の基本理念である「参加と協働」が、センターの運営に生かされています。センターの設立、運営に市民の代表、公民館運営審議会委員が参画することで、行政への市民参加が具現化されています。市民の要望等は公民館と図書館の複合施設、あるいは斬新かつ自由な施設の設計に表されています。

第3章

他地域に見るヒント

3.2 市民の学びから市民活動へ（東京都板橋区）

昭和57年の国際障害者年をきっかけに、板橋区ともに生きる福祉連絡会（板橋連）が結成され、グループホームの運営など福祉教育を推進しながら、板橋にボランティア活動を根付かせていきました。

平成12年、社会教育職員の働きで、話し合いによる学習方法を取り入れ板橋連とボランティア学習事業を協働で実施できるようになり、話し合いによる相互学習が板橋区の社会教育の文化として根付くことになりました。

平成13年の国際ボランティア年を契機に、「相互学習の力で地域社会の課題を改善していく」ために板橋連の学習部門が独立して、新たにNPO法人ボランティア・市民活動学習推進センターいたばしが発足しました。そして、大原社会教育会館との共催事業を実施するようになりました。事業実施の際に、センターは、自らが企画・運営に係わる他、課題ごとに様々な団体をコーディネートし、事業の企画・運営に携われるよう中間支援の役割を担うようになりました。社会教育職員はそれに対して指導・助言を行っています。

平成18年からは、国連が示した「持続可能な開発のための教育の10年（ODESD）」を「持続可能な未来のための学びの10年」と読み替え、これまで実践してきた「ともに生きる」、「ともに学ぶ」を進展させ、地域に生活する人々の尊厳のある生き方を支援するまちづくり、「ともに創る」を目指しています。

平成23年から、東日本大震災の被災地支援を継続し、陸前高田市及び飯館村の仮設住宅支援と交流を続けています。

一人ひとりの尊厳を実現する地域文化を目指した活動として、ガンジーから非暴力による平和の実現を学び、アフガニスタンで平和構築に関連する仕事をしている人を日本に招き、そこで学んだことを「平和の絵本」にし、ボランティアが児童への読み聞かせを行うなど多彩な活動を行っています。

運動を進めていった板橋連の強さが、正に板橋においては、人間として板橋とという地域で生き続けることを持続可能にしています。これが日本においてはどこにもなかったし、また、この概念は世界の中でもないことから国連で注目されたのではないかと思います。

福生市公民館がヒントとして役に立つと思われれることを3つ提言いたします。

- ① ボランティア学習事業の考え方
- ② 社会教育職員の働き、行政と市民との協働の様子
- ③ 被災地支援

第2に、センターの施設は自由な雰囲気的空間で溢れているという印象を強くしました。一例を挙げると、ロビーの延長として、予約なしで利用可能なフリースペースの「若者コーナー」と「思いやりコーナー」が設けられています。このようなスペースは、若者に積極的に公民館を利用してもらおうという狙いと、若者と障がい者、高齢者との対話あるいは世代間交流の可能性を見出そうというセンター側の配慮を伺うことができます。

公民館が市民の学びの場であるとともに、市民の福祉の向上を担うものであるとすれば、センターが設立された意義は少なくないと考えます。センターは、様々な市民、高齢者、障がい者が、特定の学びあるいは趣味を持たなくとも、自由に入ったり、世代を超えて対話する空間を用意しています。様々な課題を抱えた市民が対話を通して、連携し、共生の道を模索することは、まさしく市民の学びと福祉に貢献するものだと思います。

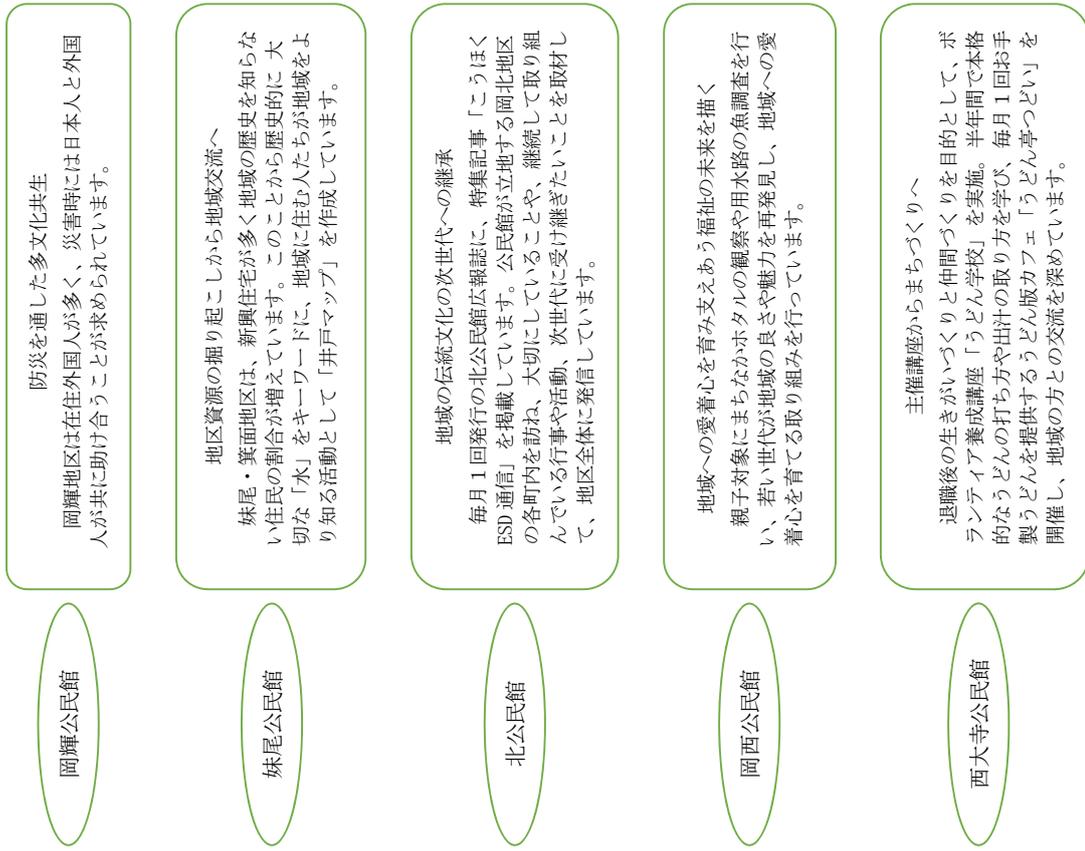
このように、センターは単に公民館と図書館の複合施設であることに留まらず、まさしく新たな「市民の対話の広場」＝「市民の交流の場」としての可能性を持っているといえます。

福生市公民館がヒントとして役に立つと思われれることを3つ提言いたします。

- ① 図書館とのコラボレーション
- ② 市民団体との緊密な活動企画
- ③ 学校（小・中・高）とのコラボレーションの模索

3.3 公民館でESD（岡山県岡山市）

社会教育の拠点「公民館」。地域に密着した、地域課題を解決することをテーマにESDを推進しています。中学校区にはほぼ1つの公民館があります。



岡輝公民館
防災を通して多文化共生
岡輝地区は在住外国人が多く、災害時には日本人と外国人が共に助け合うことが求められています。

妹尾公民館
地区資源の掘り起こしから地域交流へ
妹尾・箕面地区は、新興住宅が多く地域の歴史を知らない住民の割合が増えています。このことから歴史的に大切な「水」をキーワードに、地域に住む人たちが地域をよく知る活動として「井戸マップ」を作成しています。

北公民館
地域の伝統文化の次世代への継承
毎月1回発行の北公民館広報誌に、特集記事「こうぼくESD通信」を掲載しています。公民館が立地する岡北地区の各町内を訪ね、大切にしていることや、継続して取り組んでいる行事や活動、次世代に受け継ぎたいことを取材して、地区全体に発信しています。

岡西公民館
地域への愛着心を育み支えあふ福祉の未来を描く
親子対象にまちなかホタルの観察や用水路の魚調査を行い、若い世代が地域の良さや魅力を再発見し、地域への愛着心を育てる取り組みを行っています。

西大寺公民館
主催講座からまちづくりへ
退職後の生きがいづくりと仲間づくりを目的として、ボランティア養成講座「うどん学校」を実施。半年間で本格的なうどんの打ち方や出汁の取り方を学び、毎月1回お手製うどんを提供するうどん版カフェ「うどん亭つどい」を開催し、地域の方との交流を深めています。

高島公民館
高島旭竜エコミュージアムを語る会
高島公民館では、岡山淡水魚研究会と共に「田んぼの生き物調査〜アユモドキ繁殖状況調査」を行っています。地域の児童も多く参加しています。「川ガキ道場」「ホタル観察会」も実施しています。

京山公民館
共生を目指した多彩な広がり
地域の小・中学校の児童・生徒が公民館に集まり、地域の川や空気の汚れを調べ、地域の人に結果を報告する活動から始まりました。学校での環境教育や地域に多く在住する外国人との共生などをテーマに今では様々な催しを開催しています。

岡山市の公民館のESD 7つのポイント
1. 問題を他人事（ひとごと）ではなく自分事にする。
2. 「教える一教えられる」関係ではなく互いに学びあう関係。
3. どんな未来にしたいかを考えるために過去から現在を見直す。
4. 取り組みたい人は企画・運営から参加できる。
5. 目指すのは、地域で持続可能な社会づくりができる人が育つこと。
6. 知っただけでは社会は変わらない。課題を解決するために、小さくても行動する。行動を変える。
7. 一人でできないことも誰かと一緒だとできる。楽しい。

福生市公民館がヒントとして役立つと思われることを3つ提言いたします。

- ① ESDの考え方と実践の先駆者
- ② 社会教育の拠点としての公民館
- ③ 地域課題の解決への取り組み

3.4 なかまちテラス LiNKS と企画実行委員会(東京都小平市)

小平市公民館において最近採り入れられた新しい二つの公民館運営上の実践例を考察します。

第1は、仲町公民館の建て替えによって誕生した「なかまちテラス」です。この建物は、世界的に著名な建築設計家である妹島和世さんの設計による大変斬新でユニークな建物で、公民館と図書館が併設されている施設です。建物についてはすぐ真似が出来るものではないので、運営方法について考えてみます。

なかまちテラスは、従来の公民館と図書館機能を越えて、地域の学びとつながりづくりの拠点となることで、生涯学習の振興や地域の活性化を目的としています。地域にとっても魅力的な施設にしていきたいため「みんなで作る、みんなのなかまちテラス」を合言葉に、なかまちテラスを核とした地域協働の場「なかまちテラス LiNKS」を立ち上げました。LiNKS とは、Library (図書館)、Nakamachi (仲町を中心とした地域の皆さん)、Kominkan (公民館)、School (学校) の頭文字をとって名付けられました。

第2は、企画実行委員会制度の導入です。小平市第2次行財政再構築(平成23年3月)において、「公民館のあり方の検討」が掲げられ、その後、3年かけて職員によるプロジェクトチームを編成して公民館のあり方の検討を続け、平成25年には公運審委員も参加して一緒に検討、意見を提出しました。意見書の中で公民館の目標について、「学習活動を通じて、相互信頼の高い地域社会の形成に貢献する」に加え、「さらに利用者数を増やしていき、公民館を市民と行政の協働の拠点として位置づけていく」を明確にし、具体的に協働として、公民館事業企画委員会と同企画実行委員会を提示しました。

福生市公民館がヒントとして役に立つと思われることを3つ提言いたします。

- ① 図書館と公民館の有機的運用
- ② 公民館事業企画実行委員会の存在
- ③ 地域協働の場の秀逸なる運営

第4章

7つの提言—福生型ESDの実現に向けて—

4.1 事業をおもしろく！

まつりには人が集まるが、公民館のつどい、研修会、交流会など会議体にはいまひとつ集まりが低調だ、こんな話題を公民館では頻繁に耳にします。平成25年度に調査したアンケートの結果がこの実態を如実に示しています。こんな状況が定着してしまっただけで済まないと「なんとかしらない・・・」が公民館関係者の間ではもっぱらの話題です。しかしこの問題意識は話題に留まっただけで改善策が見いだせない、実行されないというのが実態です。ここではどうしたら事業をおもしろくできるかについていくつかの提案をします。

総じていえば現在世間で関心をもたれていることに着目することから始めることです。まつりにも会議体にも世間の話題を取り込むことです。一方運営面で効果的かつ魅力的と思われれることもいくつかあります。これらは頭でわかっただけでもなかなか手がかからないものがほとんどです。しかしこれらを直視し、できるだけたくさん取り入れ実践することも必要です。この考えのもと直近4年間の公民館のつどいや研修会で話し合われた実際の内容を振り返ってみました。そこには解決に繋がるヒントがたくさん隠されていることを再発見しました。そこから「事業をおもしろく」に繋がると思われるあれこれを抽出し表10にまとめました。

この表中で提案する「おもしろくするための変革の視点」を進めるにあたり単独での実行でも効果はあると思われませんが、「実現手段（一例）」欄に提起した各項から関連項目を複合的に組み合わせた対策を打つことも必要です。利用者に“おもしろさ”をより感じていただくことに結びつく対策には特効薬はありません。各項をひとつずつ前に進めることが重要です。

その進め方（手法）として、業務目標制度の導入を提起します。“おもしろさ追求”に向けて公民館職員の年間の組織目標、それに基づく個人別の業務目標を設定し、その目標に向かって業務を展開していただくよう要望します。そうすることで新しい交流の場のあり方を拓いていただきたいと思います。

業務目標の一例としていくつか挙げてみます。

① 講座に関して「職員Aの個人業務目標に設定」

「世間の関心、話題を加味したテーマ策定、地域の古参や町会、子供会等とのインタビュー結果もテーマ策定に繋げる、しかも年齢層別テーマを散りばめる、なかでも子供向きの講座は必ず取り入れる。講座終了時は“褒める”仕組みを考慮する」

② まつり等イベントに関して「職員Bの個人業務目標に設定」

「当年の“目玉”を大切に。企画する人・参加する人がその“目玉”に向かってイベントを作り上げていく」（マンネリ防止を配慮）

③ 会議60分運動「職員Cの個人業務目標に設定」

「人集めの工夫を。公民館から遠方に居住する人たちのために送迎バスの巡回など。そしてダラダラ会議回避のため正味60分を宣言し運動化する。『福生市公民館の会議はたったの60分！』を標語にして。会議の下準備がカギとなろう。また60分経過後数十分を茶飲み場の場・情報交換の場にし、堅苦しい感を払しょくする」

公民館職員のみならず公民館利用者（サークル構成員、講座参加者）さらに関係する地域住民など関係者みんなで表10の「実現手段（一例）」欄を深掘りしていただくことを期待します。

表 10 事業をおもしろくするための提案

事業形態	おもしろくするための変革の視点	変革の内容	実現手段（一例）	期待できる効果
サークル	より深く知り合う 詳細を与える形を 形態を変える	サークル活動の見える化 サークル活動見本市 達成感を感じさせる運営に 体験型教室を多く 特に男性への仕掛けを (加除型対策) 子ども専用講座も	相互紹介 コラボ 楽めるシステムの開発 農業体験 食育講座など こもりがちなひとを減らす (加除型対策) 学習保育との協業	新しい趣味や楽しみ方を発見 次の動機付けに繋がる 形が残る。次へのやる気に繋がる 利用者の男女の人数差の是正 子どもとときから公民館に親しむ
教室 講座	視点を変える (講座企画の 手法を変える)	世間の關心、話題の取り込み 町会等からあふれた 事業の取り込み 地域密着 地域との交流 子ども会や PTA との連携 社会貢献等で手ごたえ	ESD 的手法を本格的に インタビュー調査と企画 働きかけ 連携を開始する 早くから子どもにも社会教育 老人ホーム訪問、町内清掃、 軽化活動など	地域に根ざす新しい講座が誕生 地域支援のメニューに 福生のちまたの文化の継承 子どもの頃からの関わり 公民館サービスの推進
イベント	やりがいを感じさせる イベントを新企画 面倒くさ意識の払拭 現行の“まつり”に さらなる一工夫を	従来の慣習にとらわれない 当年の“目玉”設定を義務化 盛り込む	一例： 「流しそめん」 新規「出前講座」 マンネリ脱却のための新企画を 盛り込む	市民カフエは、たとえば若者同士が仕事や将来のことを話し合い、高齢者が若者に戦後の経済的混乱期の仕事の苦労話を語り、そして若者、高齢者が外国人に日本の伝統文化、福生の自然を説明するような場所とできればと考えています。また障がい者が若者に頑張っていることを語るということも有意義でしょう。 市民カフエの運営は、公民館、町内会、社会福祉センター等との連携によって進める必要があると考えています。当初は、町内会等が中心になって、カフェに参加する市民を募っていただければ、回を重ねると、自然と参加の輪が広がるものと期待します。このような福生「市民カフエ」は、世代間交流、国際交流を促進し、地域住民の絆をより強固にし、福生のまちづくりに貢献すると考えます。また、若者が高齢者、障がい者、外国人と交流することで、若者の居場所づくりににも繋がると考えます。
自由な場 (会議体 での工夫)	実利の仕掛け (人はカフエなもの)	送迎バスの運行 ダラダラ会議の克服 高齢者には 若者には 親世代には 子育て年代には 子どもには 茶飲み情報交換 生活の知恵 手作り工作 幼児配慮 遊び心	市内巡回 ビックアップ 60 分目標で議題項目の取捨選択 生涯学習の手助けを 楽しい実現の場を提供 やさしいビジネス講座（軽めの） 子育ての助け、役立つ情報を 子どもの頃から社会教育を 「楽しい語らい」だけ 役立ちアイテムふんだんに プロ級の技（大きな魅力）の体験 保育付き 堅苦しいことは抜き	高齢者の後さざりてカフエ 「公民館の会議は 1 時間ポッキリ」 全ての世代を公民館がカバー 公民館を知らなかったひとにも 公民館に目を向けさせる
共通	若者の呼び込み 情報発信のしかた 注力点 参加者への配慮	年寄りの利用施設という 限られた印象を払拭しよう ネット、メディアの活用 高齢者は学ぶことに 意欲旺盛 「動機＝認知症予防」の啓蒙 事業や会議体の呼びかけ 親しみやすいものへ	SNS 利用で若者ファンの獲得 (サポーターを増やしてゆく) 特に若者向け 場さえあれば若者にひく とらない 歳相応の見立て 温かく接する 「公民館のつどい」「研修会」の 名称変更 場の貸出業務手続きの簡略化	子どもとときから公民館に親しむ 地域に根ざす新しい講座が誕生 地域支援のメニューに 福生のちまたの文化の継承 子どもの頃からの関わり 公民館サービスの推進 官民協業の一大切り口 一味違う 本館まつり へ だれでもなんでも展 へ 白梅まつり へ 公民館のつどい へ
(参考) 変革のスローガン		「右手にスコップ 左手にピル」 (英国の市民活動のモットー) 二 楽しみながらやることが大事ということ		公民館活動を市民全体の活動に広げるためには、20 代、30 代の若者のみならず、子供達にも、公民館活動に参加する機会をつくるべきだと考えます。今年の白梅まつりで、小学生がけん玉パーフォーマンスを披露してくれました。子供達の必死な演技が印象に残っています。今後さらに、小学生の英会話教室等を企画し、子供達が公民館を身近に感じてくれるようになれば、すばらしいことだと思います。また親子で一緒に公民館に足を運んでくれるようになれば、子供達がやがて成人しても、自然と公民館活動に馴染めるようになるでしょう。こうして公民館活動が高齢者から子供まで全市民規模に広がれば、福生市に「持続可能な社会」の確固たる基盤ができると考えます。

データの出所：直近 4 年の公民館のつどい、記録集と本館研修会の報告の内容を参考に構築

4.2 若者を巻き込もう！

(1) 「市民カフエ」の開設

現代の若者が直面していると思われる課題を 2 点指摘します。第 1 に雇用問題です。非正規雇用が雇用全体の中で占める割合が急速に増大している昨今、とりわけ若者の不安定な雇用状況は、深刻な社会問題です。第 2 に、居場所をなくしている若者が少なくないという現実です。学校あるいは職場の環境になじめず、高校、大学を中退あるいは職場を退職し、家に引きこもる若者が存在しています。同時に、家族、友人との関係が希薄な居場所を失った高齢者が多いということも、見逃すべきではないと考えます。

既にいくつかの市では、障がい者あるいは居場所のない若者が主体の「若者カフエ」がオープンされています。福生市では、さらに全市民規模の「市民カフエ」を構想したいと考えています。居場所のない若者、障がい者、高齢者、外国人が、気軽に足を運べるような空間として「市民カフエ」の企画を提案します。

市民カフエは、たとえば若者同士が仕事や将来のことを話し合い、高齢者が若者に戦後の経済的混乱期の仕事の苦労話を語り、そして若者、高齢者が外国人に日本の伝統文化、福生の自然を説明するような場所とできればと考えています。また障がい者が若者に頑張っていることを語るということも有意義でしょう。

市民カフエの運営は、公民館、町内会、社会福祉センター等との連携によって進める必要があると考えています。当初は、町内会等が中心になって、カフェに参加する市民を募っていただければ、回を重ねると、自然と参加の輪が広がるものと期待します。このような福生「市民カフエ」は、世代間交流、国際交流を促進し、地域住民の絆をより強固にし、福生のまちづくりに貢献すると考えます。また、若者が高齢者、障がい者、外国人と交流することで、若者の居場所づくりににも繋がると考えます。

(2) 子供向け企画への注力

公民館活動を市民全体の活動に広げるためには、20 代、30 代の若者のみならず、子供達にも、公民館活動に参加する機会をつくるべきだと考えます。今年の白梅まつりで、小学生がけん玉パーフォーマンスを披露してくれました。子供達の必死な演技が印象に残っています。今後さらに、小学生の英会話教室等を企画し、子供達が公民館を身近に感じてくれるようになれば、すばらしいことだと思います。また親子で一緒に公民館に足を運んでくれるようになれば、子供達がやがて成人しても、自然と公民館活動に馴染めるようになるでしょう。こうして公民館活動が高齢者から子供まで全市民規模に広がれば、福生市に「持続可能な社会」の確固たる基盤ができると考えます。

(3) サークル、講座の展開に一工夫

福生市では、すでに劇団 COLORS、福生吹奏楽団、福生市ジャズ同好会、ハイブリッドジャズオーケストラという若者中心の演劇・音楽サークルが長年活動を続けています。これは、福生市の公民館活動の地道な成果として、高く評価されたいかなるべきだと思います。福生吹奏楽団等のように、若者の関心と呼ぶサークル活動、講座等が展開されれば、若者は、公民館活動に目を向けてくれるということだと考えます。たとえば、ロックバンド、異文化交流（外国人、福生の若者がそれぞれの文化を紹介する交流）等を企画すれば、公民館活動に新風を吹き込むことができるのではないかと考えます。

4.3 職員にさらに考えて欲しいこと！

職員にさらに考えて欲しいことを4つの課題として提言します。

①多様化に対応できる活動を

市民は多様な価値観とライフスタイルを持ち、質の高い学習・教養文化を求めようになっており、また、公民館活動だけでなくボランティア活動など様々な活動をしています。

市民の価値観とライフスタイルの変化に応じた公民館事業のあり方を考えて欲しい。

②他部署との情報交換

現在、講座・教室の開催は公民館の独占事業ではなくっており、行政の他部署が同様の事業を行っています。また、行政が専門分化や高度化しつつあり、職員が全ての行政について深い理解を持つことが難しくなっています。

このことから、行政の他部署と積極的に情報交換し知識を広め、市民が抱えるあらゆる問題・課題に対して、企画力・創造力を大いに発揮し、行政の他部署よりも一歩先んじて取り組んで欲しい。

③会議の生産性を意識

利用者連絡会や交流会の場、研修会の場、つどいに参加する市民は、経験が長い人から若い人まで様々いる中で、会議等で活発な意見のやり取りがされ、有意義に終わるためには参加者が十分な情報と理解を持つことが前提になります。

職員は、必要に応じて情報を提供して説明を行い、時には進行上の助言を与えるなど配慮することによって会議が効率的に進行し、参加者から理解とコメントが得られるように心掛けて欲しい。

④街の中に飛び込め

公民館の中だけに居ることなく、積極的に街へ出て市民と交わり、問題や課題を発見し、それを事業の中にフィードバックさせていくことが必要です。それによって、行政の縦割りを乗り越え真の行政課題・問題に迫って欲しい。

以上、①から④まで、従来以上に更に踏み込んで対応していただくことを期待します。

4.4 講座参加者とサークル参加者のバランスを！

福生市の公民館活動は、主催事業の多くを占める講座とサークル活動の2つに分けられます。公民館利用者数（年間）を見てみますと講座参加者が延べ6千人程度、サークル活動参加者が延べ8万人程度となっています。（図4）それだけ公民館の事業を支える方々が多いといえます。

そのような中ですが、現状は講座とサークルとの連携があまり密とはいえません。これとは別に、利用者連絡会・交流会、つどい、研修会も行われています。講座とサークル活動を公民館の柱とすれば、この利用者連絡会・交流会、つどい、研修会は第3の公民館の礎石といえるでしょう。

そこでこれら3つの関わり方・結びつきはどうなっているか図示したものが図3です。現状はサークル活動と利用者連絡会・交流会、つどい、研修会の結びつきがかなり強いですが、講座との関係はこれに比べ希薄です。この状況はいかにももったいない現象です。

今後は「福生型ESDの実現」に向けて、利用者連絡会・交流会、つどい、研修会をさらに活発・充実させるためにも、講座との関わり・結びつきを強化する必要があります。またサークルによる講座支援も課題といえます。

利用者連絡会・交流会、つどい、研修会との人的交流において、講座参加者とサークル参加者が同じ程度に量・質のバランスをとって活動していくことが必要です。そのための方策を企画・立案していただくよう提言します。

図3 サークル活動や講座と交流の場との関わり方の形態

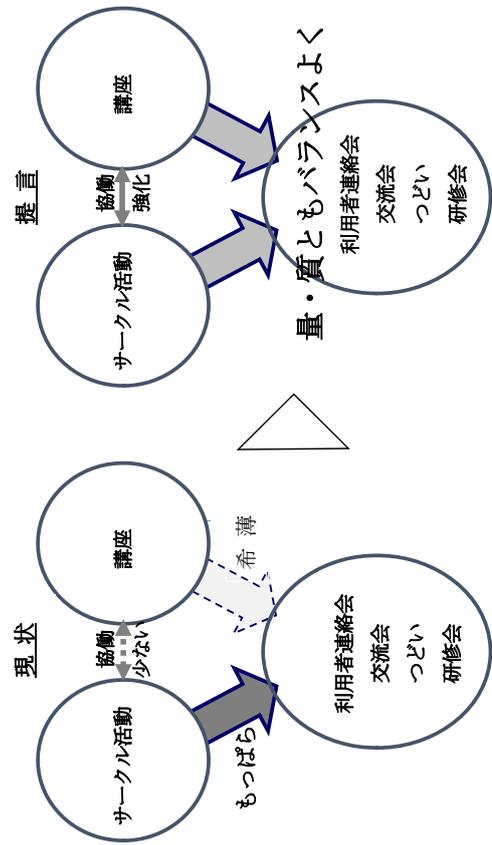
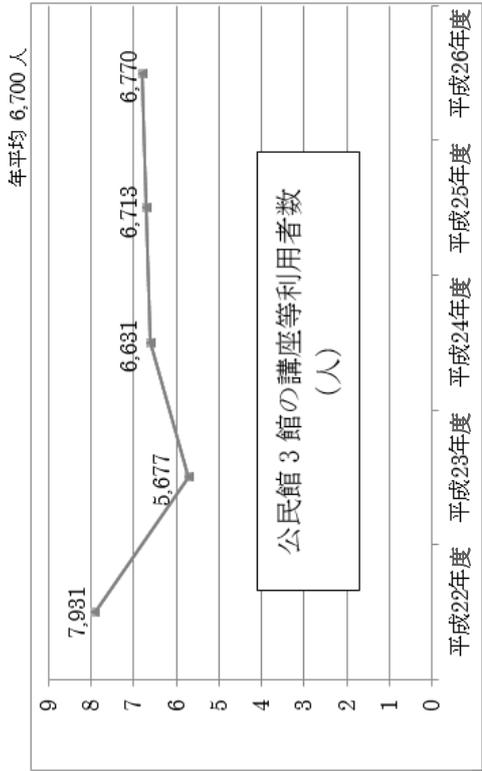
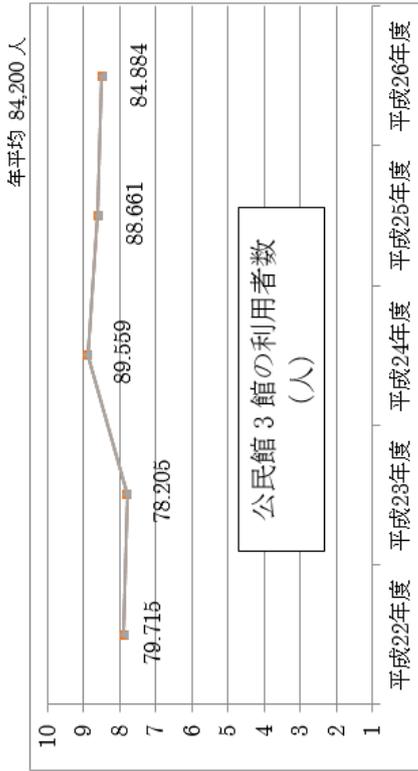


図4 公民館3館の利用者数の推移【平成22年～26年】

出典：福生市公式HPおよび福生市事務報告書



④ 展開する為のキーワードは、「増やそう、壁の少ない公民館、総合力で推進」です。

以上、公民館活動の持続可能な展開と更なる活発化を願って、「館間交流の仕掛けを！」を推進することを提言します。

表 11 館間交流の現状と可能性及び仕掛けについて

館間交流の現状は？・・・増やそう	今後の可能性は？・・・壁の少ない公民館
<p>・少ない交流の場</p> <p>1) 公民館のつどい</p> <p>2) 松林分館の「だれでもなんでも展」</p> <p>3) 市民音楽祭</p> <p>4) 人生うたい語りのつどい</p> <p>・現状の主体は3つだけ・・・？</p> <p>・館間交流の場をもっと広げよう。</p> <p>・サークル間の館間交流はどうか？ほとんどなし</p> <p>・元気で、楽しい公民館活動にしよう！</p>	<p>・活動内容が近い分野は？</p> <p>①フラダンス (本館・白梅分館) ②大正琴 (本館・白梅分館) ③コーラス (本館・松林分館・白梅分館) ④社交ダンス (本館・白梅分館) ⑤陶芸 (松林分館・白梅分館) 形を変えて再挑戦⑥太極拳 (松林分館・白梅分館) ⑦絵手紙 (本館・松林分館・白梅分館) ⑧茶道 (本館・白梅分館) 等。</p> <p>・関連する分野は・・・コラボレーションの可能性は？ 見えない壁をぶち壊そう！</p> <p>① フラダンスとハワイアン</p> <p>② 関連各種楽器演奏等</p> <p>・その他・・・異種分野の組み合わせも模索の必要性あり。</p>
進めるための仕掛けを！ (指標)・・・総合力で推進	
<p>1) 3館又は2館による共通分野による発表会や合同練習の開催。 ※指導者の元で活動をしているサークルの存在、複数のサークルを指導している指導者可能性あり、職員による指導者との調整がポイント。</p> <p>2) 関連分野でのコラボレーション可能性の提起 (利連・交流会) と合同練習や各館のまつりでの発表が適切か？ (交流・発表会の企画と実施。)</p> <p>3) 3館合同企画検討会・仮称 (利連・交流会・職員・公運審) の立ち上げで企画推進していく必要あり。</p>	

4.5 館間交流の仕掛けを！

(1) 目的

現状を打破し、各館に新たな風や考え方を吹き込むことによって、各館、各サークルのマンネリからの脱却と活性化、そして知識 (学び) の更なる向上が期待でき、元気な公民館を具現化するための必要条件です。

(2) 現状

現状の事業としては、3館合同で、毎年、企画・実施している公民館のつどいがあり、今年で35回目を迎えようとしています。松林分館で行われているだれでもなんでも展に他館 (本館・白梅分館) からの参加 (演示) がみられます。各館のコーラスサークル参加の祭典として「市民音楽祭」や、高齢者対象の「人生うたい語りのつどい」があります。現在行われている代表的な館間交流と思われる姿です。

しかし、主催事業の開催を目標に合流するだけで、日常のサークル活動でのサークル間交流はほとんどないといってもよい現状です。

(3) 新たなサークル間交流の場の可能性

① 活動内容の近いサークル間

現在のサークル間で可能性の高い分野を見渡すと複数館で行っている同類の活動サークルの存在があります。表 11 参照。

② 関連分野でのコラボレーション

例えばフラダンスとハワイアン関連や各種楽器演奏のサークル間交流等が考えられます。

(4) 仕掛けとして

① 複数館による共通分野での発表会を目指しての合同練習の開催が近道。ただし、指導者の元で活動しているサークルも多く存在しており、更に、複数のサークルを指導している指導者の存在もあり、職員による指導者との調整を行うことがひとつのポイントです。

② 交流の場の企画検討会 (利用者連絡会・交流会、職員、公運審等) を関係者で、立ち上げて企画推進していく必要があり、公民館の総合力が必要となります。

③ 最初に共通分野での館間交流を見据えて、持続可能な企画検討と実施を行い更に発展させていくことが大切です。

4.6 リーダーを育てよう！

(1) 「人材ネットワーク」の構築

公民館活動において、サークル活動や、講座を通じて核となる人材の確保は重要な課題です。公民館を中心に、学校や地域、様々な団体や、企業、NPO 法人など、行政内の各分野も含め、ありとあらゆる分野と連絡調整をし、人材ネットワークを構築することが肝要です。

特に、行政の各分野に存する情報は行政の統割りの弊害から、手に入りにくい状況です。横のつながりの核の中心として公民館が機能することが重要です。豊富である地域の人材を活用するため、リーダー人材ネットワークとして、「地域リーダーバンク」を公民館が構築し、機能することを期待します。

地域は人材の宝庫です。その活用は地域と関わりの深い公民館にかかっています。

(2) 地域リーダーを育成する養成講座の設置

豊富な人材は、誰でもリーダーとなるべく素質を有しているといっても過言ではありません。各自が有している「潜在的リーダー素養」を覚醒し、育成する仕掛けが必要です。

特に、定年退職後の年齢層や、子育てに余裕のできた層の方々は、公民館活動の担い手として期待されています。

その誘い（いざない）の手段のひとつとして、3館共通の「地域リーダー養成講座」を並行して設置します。これにより、組織のあり方や、組織の構築など、定年まで培われた豊富な経験をスキルアップし、市民自らが、公民館と協働して講座を企画するなどのリーダーとしての育成を図ります。

(3) 利用者交流会を活性化する職員の配置

利用者交流の場の活性化のため、リーダーの選任や引き継ぎは重要です。市民のみの引き継ぎや、講座の企画には、どうしても行政職員の関わりが必要で、行政においても、地域においても経験を積んだ「エキスパート」な公民館活動を熟知する専門職員（社会教育主事）を公民館に配置し、地域とのつながりを強めていくことが大切です。

地域の問題や個人的な問題等の解決の糸口が、「エキスパート職員」つまり社会教育主事であると確信しています。行政の職員配置について配慮を期待します。

4.7 活性化への指標（評価の仕組み）を持つよう！

今までに、公民館における様々な事業・取り組みを顧みるとき、活性化しているかどうか判断する「指標」がはつきりしていったでしょうか。指標（規準・基準）をはつきりさせ、それに基づいて評価し、次につなげていく PDCA サイクルが必要不可欠であると考えます。以下、活性化への指標を提言します。

表 12 活性化への指標

	活性化のねらい	指標
公民館	次世代の子供を育てる	
	市民の学び・集い・癒し・生きがい	
	職員は伴奏者・伴走者たれ	年間誕生数
	新しいサークルの誕生	
サークル活動	既存サークルのオープン化	
	公民館で得た知識・技術を共に教え、学び合う自主的な学習活動の場	
	社会性・民主性・協調性・自主性を培う場	子どもの参加者数
	次世代の子供を育てる	出席状況の公開
講座	広く会員が利達・交流会・つどい・研修会・まつりに積極的に関わる	事業評価
	全市民（含・外国人）に呼びかけ・PR をする	事業評価
	地域課題に目を向け、課題解決を図る	事業評価
	町会、PTA、各種団体と協働を行う	事業評価
	得られた知識・技術が生活向上に活かせる	事業評価
	将来のサークル活動に発展	誕生数
	課題別項目の定期的な見直し	事業評価
	「事業評価」のメンバーの拡充（例えば公運審委員）	評価の公平性
	グループ討議等の時間の十分な確保	
	「提言」実現の担保（相談結果の連続性）	
つどい	つどいに対する三館の温度差の解消	
	準備段階で自由な発言の担保	
まつり	各サークルの共通理解の担保	
	「だれでもなんでも展」を参考に	アンケート

表 12 の補足

〈指標〉
 「アンケート」
 ・分析が大事
 「誕生数」
 ・年度末に評価する。
 ・消滅サークルを把握し、原因等を分析する。

「事業評価」
 ・事業項目を定期的に見直す。
 ・評価は、「定量的」「定性的」の両面で実施する。
 （定性的内容は、言葉等として記載を残す。）
 ・「評価者」は可能な限り、拡大を検討する。

評価結果はオープン化する。
 館生市広報、公民館だより、各館だより等で、定期的又は随時に公表する。

内容概要	参加総数	本館	松本分館	白樺分館
【公民館のつどい】第27回(2008年)11月24日 9時30分～12時40分 ※実行委員会とは本館で9時～が基本となっていました。	67	27	15	25
【内容概要】 テーマ、キャッチフレーズ等 「つなごうつどいの輪 広げよう交流の輪」 「本館のなやみについて」(4名)松林：「サークル活動を通して多くの人と交流しその中から見えてきたもの」白梅：「白梅まつりが地域と密着していることについて」	17	5		
第27回(2009年)11月14日 9時30分～13時 ※実行委員会も8時から回りでする事を決定した。	22	5		
【内容概要】 「本館のなやみ」白梅：「本館のなやみについて」(4名)松林：「サークル活動を通して多くの人と交流しその中から見えてきたもの」白梅：「白梅まつりが地域と密着していることについて」	22	5		
第28回(2009年)11月14日 9時30分～13時 ※実行委員会も8時から回りでする事を決定した。	16	6		
【内容概要】 「本館のなやみ」白梅：「本館のなやみについて」(4名)松林：「サークル活動を通して多くの人と交流しその中から見えてきたもの」白梅：「白梅まつりが地域と密着していることについて」	16	6		
第29回(2010年)11月20日 9時30分～13時	106	40	23	23
【内容概要】 「本館のなやみ」白梅：「本館のなやみについて」(4名)松林：「サークル活動を通して多くの人と交流しその中から見えてきたもの」白梅：「白梅まつりが地域と密着していることについて」	106	40	23	23
第30回(2011年)11月26日 9時30分～12時 ※終了時間が12時になった。	80			24
【内容概要】 テーマ、キャッチフレーズ等 「つなごうつどいの輪 広げよう交流の輪」 「本館のなやみについて」(4名)松林：「サークル活動を通して多くの人と交流しその中から見えてきたもの」白梅：「白梅まつりが地域と密着していることについて」	80			24
第31回(2012年)11月26日 9時30分～12時	85			11
【内容概要】 テーマ、キャッチフレーズ等 「つなごうつどいの輪 広げよう交流の輪」 「本館のなやみについて」(4名)松林：「サークル活動を通して多くの人と交流しその中から見えてきたもの」白梅：「白梅まつりが地域と密着していることについて」	85			11
第32回(2013年)11月23日 9時30分～12時	90	27	10	22
【内容概要】 テーマ、キャッチフレーズ等 「つなごうつどいの輪 広げよう交流の輪」 「本館のなやみについて」(4名)松林：「サークル活動を通して多くの人と交流しその中から見えてきたもの」白梅：「白梅まつりが地域と密着していることについて」	90	27	10	22
第33回(2014年)11月29日 9時30分～12時	93			28
【内容概要】 テーマ、キャッチフレーズ等 「つなごうつどいの輪 広げよう交流の輪」 「本館のなやみについて」(4名)松林：「サークル活動を通して多くの人と交流しその中から見えてきたもの」白梅：「白梅まつりが地域と密着していることについて」	93			28
第34回(2015年)11月28日 9時30分～12時	88	24	11	26
【内容概要】 テーマ、キャッチフレーズ等 「つなごうつどいの輪 広げよう交流の輪」 「本館のなやみについて」(4名)松林：「サークル活動を通して多くの人と交流しその中から見えてきたもの」白梅：「白梅まつりが地域と密着していることについて」	88	24	11	26
第35回(2016年)				
【内容概要】 テーマ、キャッチフレーズ等 「つなごうつどいの輪 広げよう交流の輪」 「本館のなやみについて」(4名)松林：「サークル活動を通して多くの人と交流しその中から見えてきたもの」白梅：「白梅まつりが地域と密着していることについて」				

内容概要	参加総数	本館	松本分館	白樺分館
【内容概要】 「本館のなやみ」白梅：「本館のなやみについて」(4名)松林：「サークル活動を通して多くの人と交流しその中から見えてきたもの」白梅：「白梅まつりが地域と密着していることについて」	67	27	15	25
【内容概要】 「本館のなやみ」白梅：「本館のなやみについて」(4名)松林：「サークル活動を通して多くの人と交流しその中から見えてきたもの」白梅：「白梅まつりが地域と密着していることについて」	22	5		
【内容概要】 「本館のなやみ」白梅：「本館のなやみについて」(4名)松林：「サークル活動を通して多くの人と交流しその中から見えてきたもの」白梅：「白梅まつりが地域と密着していることについて」	16	6		
【内容概要】 「本館のなやみ」白梅：「本館のなやみについて」(4名)松林：「サークル活動を通して多くの人と交流しその中から見えてきたもの」白梅：「白梅まつりが地域と密着していることについて」	106	40	23	23
【内容概要】 「本館のなやみ」白梅：「本館のなやみについて」(4名)松林：「サークル活動を通して多くの人と交流しその中から見えてきたもの」白梅：「白梅まつりが地域と密着していることについて」	80			24
【内容概要】 「本館のなやみ」白梅：「本館のなやみについて」(4名)松林：「サークル活動を通して多くの人と交流しその中から見えてきたもの」白梅：「白梅まつりが地域と密着していることについて」	85			11
【内容概要】 「本館のなやみ」白梅：「本館のなやみについて」(4名)松林：「サークル活動を通して多くの人と交流しその中から見えてきたもの」白梅：「白梅まつりが地域と密着していることについて」	90	27	10	22
【内容概要】 「本館のなやみ」白梅：「本館のなやみについて」(4名)松林：「サークル活動を通して多くの人と交流しその中から見えてきたもの」白梅：「白梅まつりが地域と密着していることについて」	93			28
【内容概要】 「本館のなやみ」白梅：「本館のなやみについて」(4名)松林：「サークル活動を通して多くの人と交流しその中から見えてきたもの」白梅：「白梅まつりが地域と密着していることについて」	88	24	11	26

資料4 平成27年度講座一覧(本館・松林・白梅)

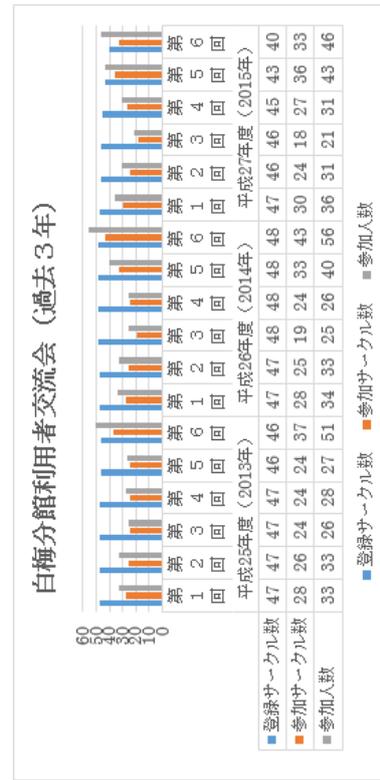
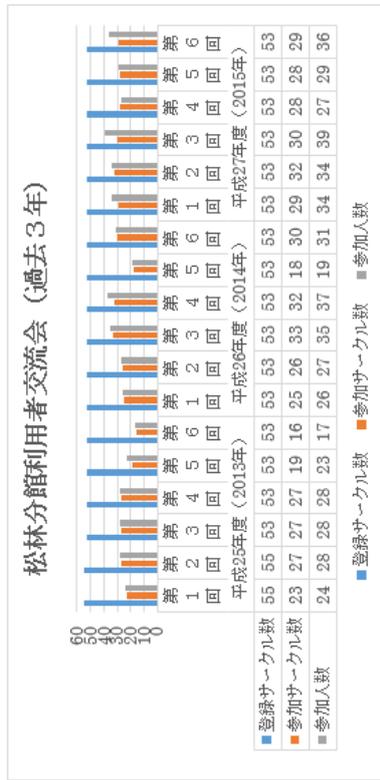
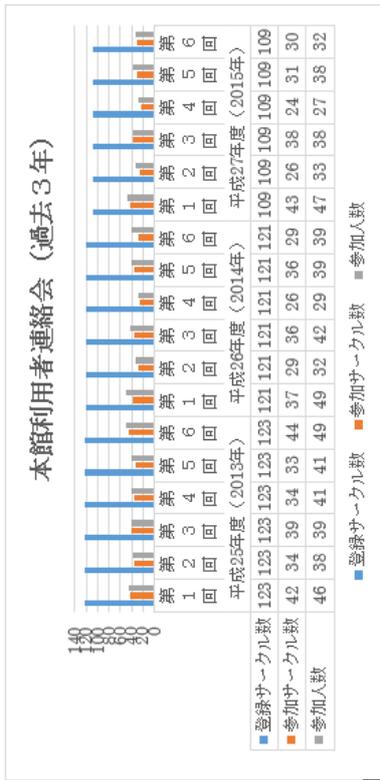
本館	玉川上水遊歩道の水辺空間を「体感型博物館」にしよう	2月13日	講師派遣援助事業：玉川上水	35
1	玉川上水遊歩道の水辺空間を「体感型博物館」にしよう	2月13日	講師派遣援助事業：玉川上水	35
2	平和講座 ヒロシマ・ナガサキ「原爆と人間」体験を聴く会～学童味～	8月12日	平和講座 ヒロシマ・ナガサキ「原爆と人間」体験を聴く会～学童味～	22
2	平和講座 平和的語彙と語り合う会	3月12日	平和的語彙と語り合う会	9
2	平和講座 ヒロシマ・ナガサキ「原爆と人間」体験を聴く会～被爆体験～	8月13日	ヒロシマ・ナガサキ「原爆と人間」体験を聴く会～被爆体験～	16
4	ハッピーセカンナードライフセミナー 「交流会」	11月20日	「交流会」	11
4	ハッピーセカンナードライフセミナー 「地域があなたを待っている」[生涯現役！地域活動のススメ]	4月18日	「地域があなたを待っている」[生涯現役！地域活動のススメ]	12
4	ハッピーセカンナードライフセミナー 「生き生きと暮らすためのマネープラン」	5月24日	「生き生きと暮らすためのマネープラン」	7
4	ハッピーセカンナードライフセミナー 「知っておきたい介護の話」	6月20日	「知っておきたい介護の話」	?
4	ハッピーセカンナードライフセミナー 「地域があなたを待っている」～コミュニケーション・カフェ見学	9月6日	「地域があなたを待っている」～コミュニケーション・カフェ見学	15
4	ハッピーセカンナードライフセミナー 「交流を広げる！ SNS活用術」	1月24日	「交流を広げる！ SNS活用術」	20
4	ハッピーセカンナードライフセミナー 「親子アウトドア講座」	3月20日	「親子アウトドア講座」	7
8	市民音楽講座 (発表を含む) 大人70、子ども20	4/12～6/21	(発表を含む) 大人70、子ども20	延べ909
8	市民音楽講座 「落語で学ぶ相継・遺言・後見」	8月30日 6月7日	「落語で学ぶ相継・遺言・後見」	24 26
8	彩の会絵手紙 夏休みのランチはおまかせ！はおまかせ！	10月22日 6/27～7/25	講師派遣援助事業 夏休みのランチはおまかせ！はおまかせ！	22 延べ23
9	夏休み自然体験 教室 親子でクッキング	8月5日	親子でクッキング	親子5組
9	夏休み自然体験 教室 親子でクッキング	11/29～12/6	親子でクッキング	7組延べ35
9	夏休み自然体験 教室 親子でクッキング	7/24、29、30、31	やまぶきの村	延べ71
9	夏休み自然体験 教室 親子でクッキング	8月30日	親子でクッキング	40
9	夏休み自然体験 教室 親子でクッキング		参加者：9名 全期間延べ142名	延べ142
9	夏休み自然体験 教室 親子でクッキング	8月12日	「リコーアート教室」	33
9	夏休み自然体験 教室 親子でクッキング	8月13日	「リコーアート教室」	33
10	福生探検隊 多文化クッキング&トーク	11/22～1/24	福生探検隊 多文化クッキング&トーク	延べ58
10	福生探検隊 多文化クッキング&トーク	10月25日	講師派遣援助事業：写真上達	15
11	多文化クッキング&トーク	8月2日	「ネパール編」	12

凡例：

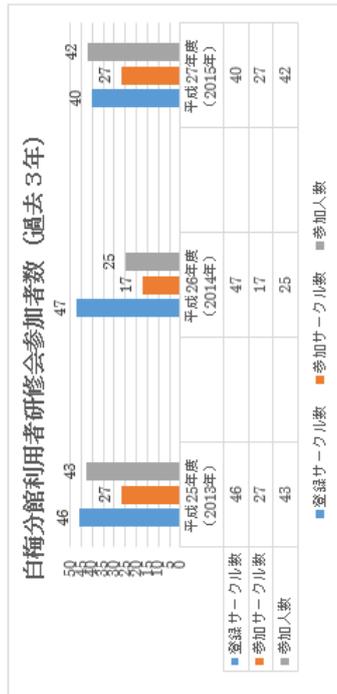
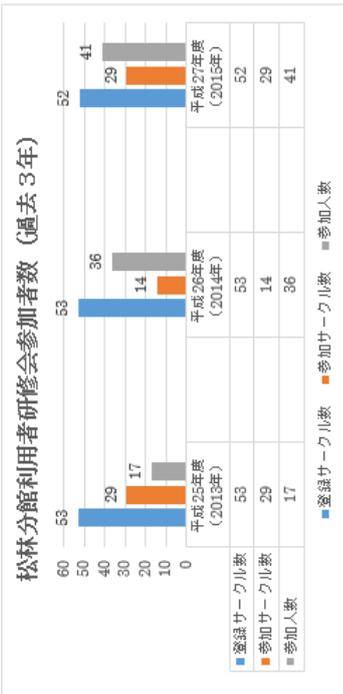
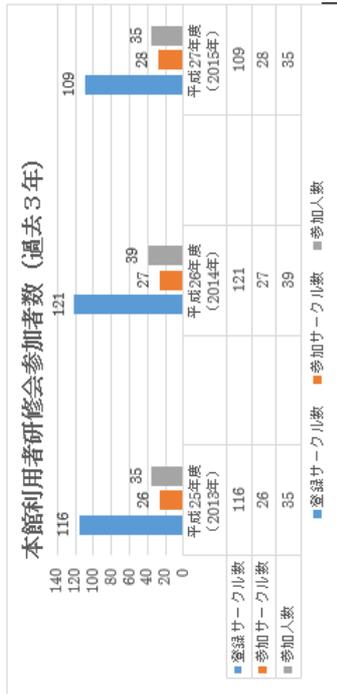
▲ = 利用者の役割・個人の責任 ◆ = 利用者、公民館両方の問題 □ = 公民館への要望・公民館主導の対策

直近3か年	講師の助言ラカルト	今後の対策 施策 実施 (べき事を含む)
本館利用者連絡会 平成24年度研修会 (実施日：平成25年3月2日) 講話のテーマ 「福生の文化・社会教育施設・福祉施設はどのようになっているか」	講話をいただいた <文化・社会教育施設・福祉施設はどのようになっているか> <事例> ① 福生の町の活性化と市制移行 ② 市民の生活と文化・教育・福祉 ③ 社会教育主導としての仕事 ④ 学習と教育、環境と学習、生涯学習と社会教育、社会教育施設と文化施設 ⑤ 真いまると文化 ⑥ 真いまると住民、市民 ⑦ 講話が市民を創るか ⑧ 講話が市民を創るか 社会教育活動者への期待(自助、互助、公助)	今後の対策 施策 実施 (べき事を含む)

資料5 利用者連絡会・交流会参加者データ



1	福生の四季折々 (夏編)	「福生の自然を感じる散策」	6月28日	19
1	福生の四季折々 (冬編)	「福生の自然を感じる散策」	12月5日	9
1	四季職時記「重勝の節句」		9月27日	47
1	熊川分水に親しむ講座	参加者19名、延べ40名	9/5～10/17 全4回	延べ40
1	熊川分水たんけん隊		7月28日	16
2	LG B T講座		9/13～12/8 全6回	延べ82
2	白梅平和映画会	「ラシゴの正面であれ」	8月11日	23
8	文字講座	「中里介山と大吾薩摩の世界」	9月18日	18
8	白梅歴史懇話会	「熊川の成り立ちと変遷」	6月14日	33
8	白梅歴史懇話会		4/9～12/8 全10回	延べ29
8	白梅歴史懇話会	「戦中戦後の熊川その2」	9/1～11/10 全8回	延べ218
8	パソコン教室I (初級)	「エクセル入門」	2/2・3・5 全3回	延べ29
9	子ども陶芸教室	「夏休み子ども陶芸教室」	8/4～21 全5回	延べ45
9	ゲーム教室		3/26、29 全2回	延べ36
12	託児付き講座	「手づくり絵本教室」参加者11名、延べ83名、子ども延べ55名	5/21～7/9 全8回 (毎週木曜日)	延べ83
12	託児付き講座	「しゃべり場へ子育てと暮らしを語り合う」	1/21～3/10 全7回	延べ86
13	大人のための食育講座 (実践編)	「カリカリ梅」	6/6～7 全2回	延べ50
13	楽しい食育講座	「食の安全を考えよう」平成27年分	3月26日	6
7	楽しいロコ・トレ講座	「お花と野菜のコンテナガーデン」	5/19～7/14 全3回 (月1回)	延べ26
	教室・講座数:	ロコモーションントレーニング	9/29～10/27 全5回	延べ57
		18		



執筆者一覧

第23期福生市公民館運営審議会委員

(任期 平成27年4月1日～平成29年3月31日)

委員 長 小野寺 萬次

副委員 長 北島 浩子

伊藤 覺

小澤 はる奈

関根 孝明

田中 宏幸

降旗 信一

八木 五郎

山西 年男

吉澤 玲子

諮問検討会 開催記録一覧

回数	日程(曜日)	時間	場所	内容
	平成28年 1月20日(水)	19:30~21:30	市民会館 第1・2集会室	定例会 諮問を受ける
1	2月 3日(水)	19:00~21:00	さくら会館 第3集会室	答申の構成、今後の進め方
2	2月17日(水)	17:30~19:30	市民会館 第1・2集会室	利用者交流の場の現状
	2月17日(水)	20:30~21:30	市民会館 第1・2集会室	定例会 今後の進め方
3	3月 9日(水)	19:00~21:00	さくら会館 第4集会室	答申の章立て
	3月16日(水)	20:30~21:30	市民会館 第1・2集会室	定例会 職員との意見交換
4	4月 1日(金)	19:00~21:00	さくら会館 第4集会室	公民館の必要性
5	4月19日(火)	17:30~19:30	さくら会館 第4集会室	各項目の執筆担当者決め
	4月20日(水)	20:30~21:00	市民会館 第1・2集会室	定例会 検討会進捗状況報告
6	4月20日(水)	21:00~21:30	市民会館 第1.2集会室	執筆についての詳細
7	4月27日(水)	19:00~21:00	さくら会館 第4集会室	交流の場の見直し・継続討議
	5月18日(水)	20:00~20:40	市民会館 第1・2集会室	定例会 検討会進捗状況報告
8	5月18日(水)	20:40~21:30	市民会館 第1・2集会室	第2章の検討
9	5月25日(水)	19:00~21:00	さくら会館 第4集会室	章立ての見直し
10	6月14日(火)	19:00~21:00	さくら会館 第4集会室	第3章の検討
	6月15日(水)	20:00~20:40	市民会館 第1・2集会室	定例会 検討会進捗状況報告
11	6月15日(水)	20:00~21:45	市民会館 第1・2集会室	第1・2章の加筆訂正
12	7月11日(月)	19:30~21:00	北島宅	章立て、執筆担当の分担
	7月20日(水)	20:00~20:30	市民会館 第1・2集会室	定例会 検討会進捗状況報告
13	7月20日(水)	20:30~21:20	市民会館 第1・2集会室	第4章執筆担当者決め
14	8月 3日(水)	19:30~21:30	さくら会館 第4集会室	第2・4章の確認、検討
	8月17日(水)	20:00~20:40	市民会館 第1・2集会室	定例会 検討会進捗状況報告
15	8月17日(水)	20:40~21:50	市民会館 第1・2集会室	第4章の検討
16	8月23日(火)	19:00~21:15	さくら会館 第4集会室	第2章検討
17	9月 6日(火)	10:00~22:00	さくら会館 第1・2集会室	第4案(全文)検討
18	9月 8日(木)	19:00~21:30	さくら会館 第3集会室	第4章検討
	9月21日(水)	20:30~21:00	市民会館 第1・2集会室	定例会 職員との意見交換
19	9月21日(水)	21:00~21:40	市民会館 第1・2集会室	再執筆、今後の予定
20	9月28日(水)	19:00~21:00	市民会館 第1・2集会室	最終修正
21	10月6日(木)	9:00~12:00	さくら会館 第4集会室	仕上げ
	10月19日(木)	19:30~21:30	市民会館 第1・2集会室	定例会 答申する



福教公発第183号
平成28年1月20日

福生市公民館運営審議会委員長
小野寺 萬次 様

福生市公民館
館長 高橋 祐彦

公民館における利用者交流の場のあり方について(諮問)

福生市公民館は、市民の公民館づくり運動の中で昭和52年に公民館本館、昭和54年に松林分館、昭和55年に白梅分館が開館し3館体制となり、それ以来、利用者の様々な学習要求に応えるべく、様々な事業の展開を利用者と共に図ってまいりました。

その中には、利用者が出会い、知り合い、交流し、公民館で学ぶ意味を考え、さらに生活や地域の課題に気づき、課題解決を図る中で互いに高まり合える、利用者交流の場である公民館のつどい、各館の利用者連絡会・交流会、それらが主催する研修会等が重要な事業として継続されてまいりました。

地域での運動の希薄化が危惧される現在、学びあい、交流しあい、連帯しあいながら地域をつくる市民を形成していくという公民館の役割の中で、これら利用者交流の場はさらに重要となっていくものと考えます。また、この利用者交流の場は、個々に活動するサークルの活性化にも資するものと考えます。

つきましては、公民館運動のさらなる振興、活まりを促進するために、利用者交流の場をどう活かしていくかについて御意見を賜りたく次の事項につき御意見を伺います。

1 公民館における利用者交流の場のあり方について

2 答申の時期
平成28年10月